

503

115



始



209

503-115



渡部實夫著

智慧の木の實を盗む子

東京 大村書店刊行

大正  
11.7.15  
内交



はしがき

つくづく、考へることは、いやになつてしまつた。お祖父さまのお庭掃除の手傳ひをする方が、よつほど樂だ。

といつて、考へないわけにはいかぬ。かうなれば、まるで病のやうなものだ。お隣りのおぢさんは、病と名のつくものに、一つだつて善い病があつてたまるものかといつたが、こんなに苦しい所を見ると、ほんとうに、考へる病といふのがあるのかも知れぬ。

とすれば、早く止してしまはなければならぬ。けれども、止せばよけいにつまらなくなる。

ほと／＼弱つてしまふ。

はしがき

或は、これがお父さまから聞いた、アダムが智慧の木の實を盗んだ罰といふの  
のかも知れぬ。

大正十一年五月五日

著者識

もくろく

- 一 お母さんのない人間があるか……………一
- 二 お父さんのない人間があるか……………五
- 三 なせ人間には両親なければならぬか……………七
- 四 人間最初の両親は誰であつたか……………一二
- 五 人間の祖先是猿の仲間だ(イ)……………一七
- 六 人間の祖先是猿の仲間だ(ロ)……………二三
- 七 人間の祖先是猿の仲間だ(ハ)……………二九
- 八 人間の祖先是猿の仲間だ(ニ)……………三六
- 九 猿と人間とはどちらが兄か……………四七

もくろく

一

- 十 猿は古いからはやらなくなる……………五三
- 十一 猿より古いものは居ないか……………六五
- 十二 生き物のほんとうの祖先は何か<sup>(1)</sup>……………七八
- 十三 生き物のほんとうの祖先は何か<sup>(2)</sup>……………九二

- 一 僕は生きて居るか……………一〇六
- 二 僕が生きて居るならアミーバは死んで居るわけだ……………一三三
- 三 アミーバと草木とどちらが上等か……………一四六
- 四 生き物の生命とは何か<sup>(1)</sup>……………一五三
- 五 生き物の生命とは何か<sup>(2)</sup>……………一七一
- 六 生き物の生命とは何か<sup>(3)</sup>……………一九六

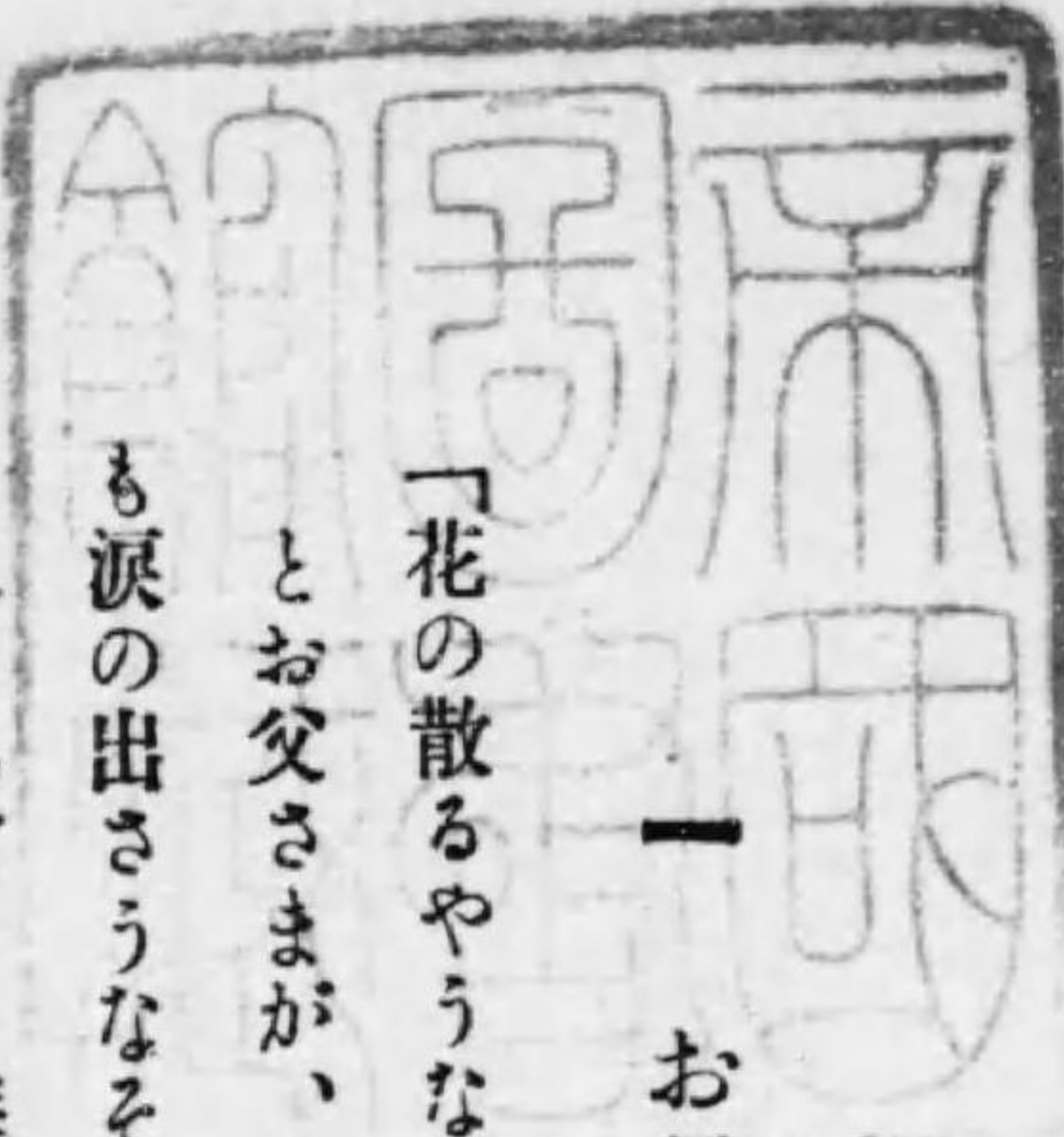
- 一 僕には心があるから生きて居る……………二一四
- 二 生きて居るものは心ばかりだ……………二二二
- 三 ほんとうの僕はほんとうの心だ……………二三二
- 四 心のはたらき<sup>(1)</sup>……………二四四
- 五 心のはたらき<sup>(2)</sup>……………二五七
- 六 心のはたらきと生命……………二七二
- 七 ほんとうの生命とは何か……………二九七



# 智慧の木の實を盗む子

渡部實夫 著

一 お母さんのない人間があるか



「花の散るやうな夢見てさめた……」

とお父さまが、座敷で横になると、よく歌ふ。何のことが解らないが、今にも涙の出さうなその聲を聞いて居ると、妙に僕も悲しくなつて来る。お父さまのしよんぼりと庭に立つた姿は随分淋しさうだと、お隣りのおばさんも話して居た。なる程お父さまは、お隣りのおぢさんのやうに元氣よくにぎやかに話したり笑つたりしたことがあまりない。めつたに口をきくこともない。そして何

一 お母さんのない人間があるか

一

を思出すか時々憐れつぼい聲を出して、あんなやうな歌をうたつて居る。「坊ちやまもおかあいさうね、お母さまがおありだとどんなにか善いのに。」あの歌聲をきくとお隣りのおばさんは、必ずきまつたやうにかういふ。

僕には始からお母さまがないのではない、僕が三つの年に死んだのだとお祖母さまが話した事がある。十日ばかり前に、先生が「梶山さんにはお母さんがないんですね。」といったから、さあ悲しくなつた。「無いのではないんです。あつたが、僕が三つの時に死んだんです。」と泣き聲でどなつたら「さうく、あつたのでしたね、先生が悪かつた、御免なさい。」と謝つたのであつた。「始からお母さんのない人があらうか。」と聞いたら、中學の四年生になつて居るお隣りの兄さんは、

「お母さんのない人間といふものは、何所にもありやしないさ。」

といつて居た。僕にも、今でこそないが、元はあつたのだ。お祖母さまが、

さう云つて居たから嘘でないにきまつて居る。それならば、お父さまのお母さまは誰だらう。それはお祖母さまかも知れない。確かに其れに違ない。お祖母さまにも何所かにお母さまがあるはずである。しかし、僕見たやうに死んで無くなつて居る人もあらう。お祖父さまにもあつたのであらう。学校の先生にだつてあるはずである。先生も僕らと同じやうに御飯を食べるのだもの。去年、職員室へ用事でつと入つて行つたら、皆の先生が、僕らと同じやうなアルミの辨當入れから御飯を食べて居たので、びつくりして飛び出したことがあつたが、先生だつて同じ人間だものと、お祖母さまもいつて居た。天子さまだつて同じことかも知れぬ。

歴史で、三韓征伐のお話を聞いた時、神功皇后さまのお腹に、應神天皇が入つていらつしやつたのが、九州へお歸りになつて、お生れになつたとのことであつた。さうさう、歴史には随分天子さまのお母さまのことはあつた。教はる



時には、ぼんやりして聞いたり讀んだりして居るが、考へて見ると、そんなことはちやんと書いてある。今の皇太子殿下にもお母さまがある。歐洲からお歸りになつた時に、新聞に「御久し振りの御對面のこととて、御母君陛下には……」とか書いてあつたから、皇后陛下は、皇太子殿下のお母さまに違ない。アメリカ人や、フランス人などを見ると何だか繪にかいた人間でも見るやうに思はれるが、でも時々、乳母車に人形のやうな赤ん坊を乗せて行くのを見ることがある。押して行くのが、あの赤ん坊の親に違ない。考へて見ると、お隣り兄さんのいふやうに、お母さんのない人間といふものはないといつてもよからう。やはり、中學へ出て居る人は偉いものである。

## 二 お父さんのない人間があるか

お母さまのことを親ともいふのだが、親はお母さまばかりでなく、お父さまのことともいふと、知つて居る。で、お父さまとお母さまで両親である。

僕にお母さまがないやうに、お父さまのない人もあるやうである。けれども、是れも元々あつたものが、病氣でなくなつたり、よそへ行つたりしてなくなつたのでなければならぬはずだと思ふ。まだお隣りの兄さんに、お父さまのない人間は何所にもないとは聞かないが、其れ位なことは考へて見ても知れることである。所が、今思出すことがある。

前に大澤君が、イエスさまのお母さまはマリアさまだが、お父さまは始からなかつたのだと話したことがあつた。ふんと、其の時は、何の氣もなく聞き流して居たのであつたが、僕の今の考からいふと、大へんなことである。イエスさまといふのはクリスト教を始めたクリストのことださうだが、クリストも人間だとすれば、始から、お父さまがないとは、けしからぬ話だと思ふ。大澤君

は、ちやんとクリスト教の聖書といふ坊さんのお經のやうに大切な本の中に書いてあるのだと云つて居たが、なる程、大澤君のお父さまはヤツだから、そんなヤツのことは、くはしく知つて居るのであらうが、しかし、おかしい。一體、兩親なくても子供があるものだらうか。そんなら、お父さまのない人のことを「父なし子」だなどといぢめなくて善いわけであらう。お父さまのない人にも、りつばなクリストのやうな人があるのではないか。しかし、おかしい。

僕には、どうしてもわけが解らない。どうしてもそんな話は嘘だと思はれる。随分そんな古いことを本に書いてあるのには、當にならないこともあると聞いて居る。僕らが教はつた歴史にも、瓊々杵尊が高天が原から九州の高千穂の峯に天降り給へりとあつたが、今の、あの高い高千穂の峯へ下りて來るとすれば、高天が原は、もつとく、高い所になければならぬ。どうしても下りて來られたのだらう。まさか飛行機に乗つて來られたのでもあるまいし、鳥のやうに羽が生

えて居たわけでもあるまい。書いてある通りがほんたうだと考へることは、出來ないやうに思はれる。クリストにお父さまがなかつたと書いてある話も、僕は何だか餘り當にならぬことだと思ふ。誰も今から何千年昔のことを、見て居る者もないから、嘘かほんとうか知つて居るものもあるまいが、僕は、どうしても、ほんたうにすることは出來ない。

僕らには必ず、兩親揃つてあるはずであるといふことを、今度、お隣りの兄さんか、先生かに確めて見よう。僕の考は、決して間違でないにきまつて居る。

### 三 なぜ人間には兩親がなければならぬか

お隣りの兄さんに聞いたら、其れはお父さまに聞いて御覽。君のお父さまは學者だから何でもよく知つて居るといつて、教へてくれなかつた。けれども、

僕のお父さまは、あまり物をいはないから、僕もあまり尋ねない。で、先生に聞いたら、

「理科で花のことを教はつたのでせう。植物には大抵花があつて、花には大抵實が出来たのでせう。」といったから、

「え、中には花のない植物や、花があつても實の出来ないものもあると先生が教へたこともあります。」と答へたら、

「それはそんなのもあつたが、それは極少いのです。そして、實の出来る花はどうなつて子房がふくれましたか。」

「雄しべの花粉が雌しべの頭に着いて、だん／＼に下へ下りて子房へまで行きます。」

「その通りです。子房で出来る實は、人間で云へば子供です。雄しべはお父さんです。雌しべはお母さんです。雄しべだけあつても實は出来ません。雌しべ

だけあつても實は出来ません。お父さんだけでもお母さんだけでも、子供は出来ません。必ず両親なければなりません。」

と、何だか、全で、謎のやうな事を云つたから、

「先生、何だか謎のやうで、よく解りません。」と云つたら、

「よく／＼考へて御覽なさい。やがて解るやうになります。」

と、にこ／＼笑つて居た。仕方がないから、だまつて居たけれども、中々、ちよつとで、解りさうにもない話のやうに思はれて、暇があると考へて居るのである。花から出来る實が子供だとは、なるほどさうかも知れない。雄しべの雄といふ字は、男といふのと同じ意味だと教はつた。雌しべの雌は女だと聞いた。考へて見ると、或はさうかも知れない。鳥でも獸でも、雄、雌があるが、男の方が雄で、女の方が雌であるから實が子供に當るのかも知れぬ。しかし、鳥でも獸でも子供を生むのは雌の方で、雄は決して生まない。僕の伯父さんの

家には鶏を飼つて居るが雄は居ないでも、雌がひとりで、卵を産んで居る。

僕だつて、お母さまのお腹から出たのだとお祖母さまは云つて居た。伯父さんの家にも去年赤ん坊が生れたのだが、伯母さん一人で生んだのだ。先生は、お父さま一人でも、お母さま一人でも子供は出来ません。といつて居たがおかしい話だ。

が、考へて見ると先生のいつたのもほんたうかも知れない。伯父さんの家の姉さんが去年お嫁に行つたら赤ちゃんも今年の正月出来たのだつた。お婿さんの出来ないまでは、赤ん坊なんか出来なかつたのだから。近所でも、お嫁入りをすると不思議に子供の出来る人があるやうだが。とすれば、お婿さんは男だから雄しべで、お嫁さんは女だから雌しべだと見れば、先生の云つた理屈に合ふやうである。

が、あの鶏の卵は一體どうしたのだらう。ほんとうに一人で産んで居るから

妙だ。

さうだ。思ひ出すことがある。いつか僕が伯父さんの家へ行つて居たときに、卵買ひのおばあさんで来て「こちらさまのは、では、種卵子には出来ませぬ。別にしておきませう。」といつたことがあつて、

「種卵子つて何に」と伯父さんに問ふたら、

「卵を温めて、中からひよこを出す卵だ。ここのは雄鳥が居ないから、ひよこが出ないんだ。」と話した事があるが、雄のない、自分一人で雌が産む卵からはひよこが出ないとする、つまり子が出来ないといふことになるわけだ。だから、どうしたつて、子供が出来るのには、両親なければならぬといふことになりさうだ。先生は、ひよつとすると、お隣の兄さんより、偉いかも知れぬ。

## 四 人間の最初の兩親は誰であつたか

兎も角も、人間には誰にも、必ず兩親があるはずであると云ふ所までは解つた。學者といふものは、よく、私の考へます所によりますと……と云つて置いて話を進めるものだが、僕も、僕の考へる所によると、人間には必ず兩親がなければならぬと、大きな聲で、人の前で云つても大丈夫だとの自信が出来た。クリストにさへ必ずお父さまがなければならぬと、どんなヤソの熱心な人に向つてでも云ふことが出来る。クリストのお父さまにも、亦お父さまがある、其のお父さまにも亦お父さまがある。かう考へて行くと随分果てのない話ではあるが、何にしても、其の親、其の親と、必ず親がなければならぬはずである。其の名を云つて見ると云はれてはちよつと困るが。ならば其の最初の兩

親は、一體誰であつたのだらう。源氏と平家と戦をした話を聞いた時に、皆自分の先祖の名を名乗つてから勝負をしたと云ふことであつた。又、歴史を教はる時に先生は「大和民族の發祥は天照大神より、而して、大日本國の創建は神武帝より」とむづかしい口調で如何にも自慢さうに話し出す。先祖といふものは忘れてはならぬものだと思つて居るが、ならば、僕らの先祖の最初の人を忘れてはなるまい。所が、僕は、僕のお祖父さまは知つて居るが、お祖父さまのお父さまは知らない。そんなことで、どうして人間の最初の人か解るはずがない。先生は高天が原といふ所は今の何所にあたるのか解らないと話したが、それが解らない位で天照大神の先祖の、その又先祖と尋ねて行つてどうして解るわけがないではないか。どうかしたら、解る方法はないものであらうか。

今思ひ出すことがある。いつか、何かの本を見たら、樹がたくさんに生えて、眞紅な花が咲き亂れた中に、男と女の二人の人が、眞つ裸で立つて居ると、横

の方から小さい蛇が舌をべろ／＼と出して居る繪があつた。お父さまに聞いたら、

「人間が始めて、神さまに造られた時の有様だ。この樹の生えた所はエデンの園といふ、極樂のやうな温い、食物の幾らでもある所で、最初に土をこねて造られたのが、アダムといふこの男の人。アダムの寝て居る間に其の肋骨の一本をはづして土をつけ息を吹き入ると、イブといふこの女の人が出来た。温いから着物がいらす、こんなに果物がたくさんにあるから働いて作物を作らなくとも食べられたのだ。それをこの蛇が出て来て「其所にある智慧の樹の實を食べると、お前らも、神さまのやうに利口になる、神さまが、そればかりは食べるのではないと云ふのは、お前らがそれを食べて神さまのやうに賢くなるのを恐れて居るからだ」と、女のイブに話したのでイブが男のアダムに話して、アダムが其の知恵の樹の實をとつてイブにもやり、二人で食べると、神さまが大

へんに怒つて、つひに二人をエデンの樂園から追ひ出してしまつた。二人は、それからは、何にも出来ない荒野に立つて一生けんめいに土をたがやして汗を流して、やうやく食べることが出来るやうになつた。人間は皆この二人の子孫だ。それで人間には苦勞がたえぬのだ。」と話して呉れた。

「ほんとうですか。お父さま。」といつたら、

「ヤソの舊約聖書といふのに書いてあるお話で、嘘かほんとうかお父さまも知らない。しかし、中々にうまく出来た話だ。」

と感心した様子で話したことがあつた。

なるほど、お父さまの云ふやうに、うまく出来た話だ。僕のやうに、其の親がなければならぬはずであると考へ考へて、幾ら進んで行つた所で、終に解りつこのない人間の祖先のことも、アダムとイブとを神さまがお造りになつたのだと云へば、誠によく解る。さうすると、人間は神さまがこさへたものである

といふことになる。丁度、人間が人形をこさへるやうに土やなどで人間の形を造り、ふつと息を吹き入れると生きた人間になる。道理で、人間は中々によく出来て居る。人間のこさへた人形はどんなに上手に出来て居ても、物もいはないし、食べもしない。人があやつらなければ動きもしない。さすがに神さまの造つただけに、人間はほんとに調法に出来て居る。

吾々人間の最初の人にはアダムとイブであると解つた。新約聖書とかいふヤソの本には、大澤君の話しの様な、クリストにはお父さまがないとか云ふへまな事が書いてあつたが、舊約には随分りつばな事が書いてある。やはり古い本にも、善い所があるとお父さまは、よくいふが、考へて見るとお父さまも偉いと思ふ。先生より偉いかも知れぬ。

## 五 人間の祖先は猿の仲間だ (イ)

僕は、人間の最初の人アダムとイブとだと解つてうれしくてたまらず、一昨日の理科の時間に、先生が何でも質問はありませんかと云つたから、いきなり、

「先生、吾々人間の一番の先祖は誰でせう。」  
と聞いた。

「さあ、誰ですか。とてもそんな事は解りつこはないでせうよ。」  
と答へたから、

「先生、僕も先生のやうに、とても解らなくて大へんに氣を落して終ひましたが、段々に考へて居ると、うまいことを考へ出しました。」

「ほう。其れは面白い。どんなことですか。」

「それはね舊約聖書とかいふ本に書いてあるアダムとイブの話です。」  
「なるほど。」

「僕のお父さま、お父さまのお父さまと考へて行くと、とてもく、何所まで行つたつて果てがありません。で、一番の先祖の人のことについては思ひ切らなければならぬのかと思つて居ますと、ふつとお父さまから聞いた、アダムとイブの話を思ひ出しました。結句、アダムとイブを神さまがこさへて、エデンの花園に住ませて居たのが人間の始まりだといふ事です。神さまが造つた人間だから、ほんとうにこんなりにりつばに出来て居るのだなと、すつかり感心して終ひました。どうでせう先生。」

「さうですね。中々どうして、あなたは善い頭だ。さすがは、お父さまのお子さん程はある。」

「先生、誰でもお父さまの子でないものはありません。」

「いや、全く、さうです。所でね。今のアダムとイブの話ですがね。なる程さうした考へ方もありますが、まだ違つた考へ方もあります。」

「どんな考へ方ですか。」

「其の話は舊約聖書に書いてあるからほんとうだといへば其れまでですが、其の聖書に書いてあることがほんとうだとは、どうして、あなたは、はつきりと思ひますか。」

「けれども、さう思はなければ、先祖の話が解りませんもの。」

「あなたのお父さまが、中々うまく出来た話だとお仰つたのは又深い意味があるのでせう。が又考へをかへて見ると、親の其又親と考へて行けば、親はあるには相違ありますまいが、いつまでも同じ様な人間で居るものでせうか。」

「先生、でも、人間の親は人間ではありませんか。」



「さうです。人間の親は人間です。が、あなたのお父さまは全くあなたと同じでせうか。」

「それは違ひます。」

「親と子とは、其れはよく似るもので、昔から瓜二つとか何とかいふ諺もあります。又瓜の蔓には茄子はならぬといふのもある位です。しかし、如何瓜を二つに割つても全で同じにはなりません。なるほど、瓜の蔓には茄子はなりません。すまいが、一本の瓜だからとて、まるで同じ瓜が生ることはないでせう。」

僕は、もつともな話だから、

「さうです。さうです。」と云つた。

「あなたには御兄弟がないのだから例にとることは出来ませんが、あなたのお父さまには、未だ御兄弟がおります。」

「え、伯父さんが一人とおばさんが二人あります。」

「其れ等の方は皆同じお母さんのお腹からお生れになつたのでせうが、お顔だけでも随分違つて居ませう。」

なるほど考へて見ると、お父さまと伯父さまでも似ては居るが違つた所もある。

「さうです。」

「同じ所は遺傳といつて、親子は必ず同じ似た所があるのです。お父さまと似て居なくてもお祖父さまと似たり、お母さまの方のお祖母さまと似たりなどすることもあるのです。所で、同じでない方も亦必ずあるのです。お祖父さまよりお父さまは少しかはり、あなたは、お父さまより少しかはり、あなたにお子さまがあれば、あなたより少しかはり、段々にかうして何代とたつ内には、元のお祖父さまとは、全く似てもつかぬ人が出来はせぬのでせうか。」

さうだ、さうして行く内には、次第々々にかはつて行くはずである。

「そのかはつて行くことを變異と名をつけますが、あなたのお父さま、その又お父さまと幾百代幾千代も昔へ返つて行けば、ほんとうにひどいかはり方になれるでせう。」

「すると、先生、同じ人間でも、今の人間と、昔の人間とは違つて居るわけですね。」

「違つて居なければならぬはずでせう。」

そのやうにしてすべての生物は、段々にかはつて来て、現在のやうになつたのだと、始めて大びらにいひ出したのは今から百年ばかり前のイギリスの學者ダアウインといふ人でした。その頃、ドイツにもフランスにも同じやうな考をもつて居た學者もあつたのです。ダアウインはアメリカから南洋の方を旅行して、昆蟲の色々な種類をよく調べて、自分の考を確め、終に、人間の先祖は猿と同じ仲間であらうと云ひ出したのです。今日は之れでおしまひにしませう。」

## 六 人間の祖先は猿の仲間だ (四)

アダムとイブのお話で、人間の先祖のことは解つた都合で居たら、先生は昨日は未だ考方があると云つて、とうとう先祖は猿と同じ仲間であつたらうと云つたダアウインの話を持ち出した。だから、よく大人の人は、毛のたくさんに生えてる人を見ると、

「あれは、猿に返つたのだね。」

などと笑ふことがあるが、ダアウインの話をちやんと知つて居るのだらう。

人間の親は何所まで返つて行つても、人間であると考へると、今までの僕の考のやうに行きつまつて終つて、動かれなくなる。舊約聖書のアダムとイブのお話も、僕と同じやうな考の人が考へたことと見える。先生は、親と子とが何

所か同じ所があるのは遺傳といふのだと云つたが、遺傳といふことばかり考へて居るときつと僕らのやうな風にしか考へられないのだらう。親のもつて居ないかはりが子に起るといふことを考へて見ると、ダアウインのやうな考になるのは當然だ。ダアウインはほんとうにうまい所に目を付けたものだ。實際に、同じお母さんの子供でも、學校に来て居るお友だちを見て、兄弟同じ人がないからね。そうするとダアウインの考方は其の變異とかいふ方を見た考方といふわけである。或はこの考方の方が舊約聖書のよりも上手な考方かも知れぬ。しかし、段々考へて、先祖は猿の仲間だとは少しひどいやうだ。そんなやうなことなら、昔の軍の話のやうに、大きな聲で先祖の名など名乗られないことなる。「吾こそは、箱根山中に棲んだ大猿の千二百代の後胤……」なんつてちつとも名譽にならない。ならない所ではない不名譽である。先生はやはり、ダアウインの考を善いと考へて居るのであらうか。

明日は理科の時間があるから一つ聞いて見よう。

又質問はありませんかと來たから、僕は早速立ち上つた。

「先生、此の前の理科の時間にお話しをして下さいましたことはよく解りました。先生も、ダアウインと同じやうに人間の先祖は猿の仲間だとお考へになりますか。とすると、先祖のことはあまり名譽な話ではありませんね。」

と一息にしゃべつて終つたら、

「さう／＼、猿と同じ仲間だといつた所まで話したのでしたね。ではその次を話させよう。」と云つたから、

「その次のお話よりも先生はどうお考へになつて居るのですか。其れを先きに聞かせて下さい。」

「私には、そんな昔の話がほんとうか嘘か解りません。ダアウインの考へが正しいか正しくないか知りませんが、ダアウインがその説を述べた頃の人も、大

抵あなたの御考へのやうに、人間の先祖を猿の仲間だなどといはれるを大へんに怒つてしまつたのです。舊約聖書にあるやうに、人間は神さまがお造りになつたものであるとばかり信じて居たものを、猿と同じ仲間では中々承知が出来ませんからね。第一番に、神さまのお言葉を馬鹿にして居ると非常に怒つたのです。しかし、前にもお話ししたやうに、其の頃は學者たちにも、デアウインの考のやうな人々もあつて、クリスト教の人々の怒るのを、さ程恐れもしなかつたのです。蟲けらから鳥魚、獸や人間と、皆神さまが別々にお造りになつたのだと舊約聖書には書いてあるのですが、蟲の類にしても、鳥の類にしても、自然にも、段々に色や形など、かはつて行くことがあり、又、人間が手をかけて、色々なあいの兒をこさへることも出来るのだから、そんなことを考へて見ると、神さまが造つたものだから、何時でも人間は人間で、鳥は鳥で、といふわけには行かぬ場合があると考へねばなりません。人間にも先祖があつたこと

は疑ふことは出来ませんが、それが必ずしも、今の人間と同じものであつたとは斷言も出来ません。要するに、舊約聖書を一も二もなく信じて居た人は、ほんとうの自然といふものを見落して居た所もあることは確かです。聖書には、たとひ神さまの造つたものはいつまでもかはらぬと書いてあらうがあるまいが、自然の中にあるものは、かはつて行くものが、實際にあるのですから、デアウインや其他の學者が、クリスト教信者たちのおどかしにびくともしなかつたのも、もつとも思はれます。」

「先生、現在あるものが、昔から段々にかはつて來たものであることは解りました。しかし僕には、何で人間の先祖は猿の仲間でなければならぬかと云ふことが解りません。人間は今までにかはつて來て居るのでせうが、何も猿から段々にかはつたのだといはなくとも善いものではありませんか。其れとも何か確かな證據があるのですか。何だか人間とよく似ては居ますね。」

「そのお疑ひはもつともです。デアウインの唱へた進化論も、今あなたがお疑ひになつて居るやうな證據がないものならば、とても、今日の人貴びはしないのでせうが……」

「先生、進化論つて何ですか。」

「今までお話したやうに、生き物は、次第に先祖からかはつて、りつばなものになつて来るものだといふ論です。」

「では、人間も猿のやうなものから次第はかはつて、今の人間のやうな、りつばなものになつたといふのですね。進化論では。」

「さうです。」

「しかしおかしいな。先生どんな證據があるのですか、一體。」

## 七 人間の祖先は猿の仲間だ (ハ)

聖書の中には神さまの造つたものは、かはらないと書いてあらうがあるまいが、自然の中の生き物がかはつて行くのは實際だと先生は話したが、ほんとうにさうだ。お隣の兄さんと、義雄ちゃんとは何だか兄弟のやうには見えない位似て居ない。昔から兄弟などがこんなにかはつて居るのは誰の目にも解つて居たのであらうに、どうして、かはつて行くものだといふデアウインのやうな考を起さなかつたのだらう。聖書は誰が書いたのか知らぬが、考へて見てもく、終に解らなかつたので、神さまが造り給ふたのだと云ふ話にして終つたのであらう。よくよその人が僕を見て、

「これは何所の坊ちやま」

と聞く。近所の人が、

「梶山さんのですよ。」

といふと、

「道理で、どこかお父さまに似て居らつしやる。」

といふ。近所の人に云はせると、僕はお父さまには、ほとんど似て居ないさうだ。額の上が少し高くなつて居る所位で、頭の形も、顔立ちもそっくりなくなつたお母さまださうだが、梶山さんの坊ちやまだと聞くと、そのたつた一所似て居るといふ額の上だけ見て、道理でお父さまに似て居るといふ。違つた所は、ちやんと忘れてしまつて居る。並な人は大抵こんなやうなものかも知れぬ。其れだから、つひ考へが行きつまつて二進も三進も行かなくなる。

さすがにダアウインのやうな人は偉いもんだ。誰の目にも解つて居ることをいひ出したからとて、ちよつとも偉くないといふ人もあらうが、僕は決して、

さうは思はない。

先生は、ダアウインの考は進化論といふのだと云つたが、こんな大発見なら、そんなむづかしい名前をつけて世界の人の前に持ち出してもりつばなものだらう。

しかし、僕には、どうしても、あの猿の一件が合點がいかぬのだが。親子代々かはつて行くことが實際ならば、似て居るといふことは、どんなかはり方をいふのであらうか。僕は、かはらない所があるから、即ち親から其のまゝ譲り受けて来る所があるから、似て居るのであらうと思ふ。すつかりかはつて終ふものなら似て居るはずがない。さうすると、かはらないといふことも實際でなければならぬ。ダアウインの云ふやうな變異が事實であるものならば、遺傳も事實でなければならぬと思ふ。

若し進化論といふものが、其のかはること一點張りで出来た論ならば、聖書

をほんとうだと考へて居た人々が、神さまの造つたものは、少しもかはらぬものだと考へて居たことが間違つて居るのと同じやうに、進化論も片輪な考へ方だと思はねばならぬ。そんな片輪な論で人間の祖先は猿の仲間であつたと云はれても承知が出来ない。

しかし、さう一がいについてもならないから、先生にはつきりと聞いて見よう。何だか、どうも猿と一所ごたにされるのが癪にさはつて仕様がな

僕の前は随分朝早く来るから、今日はうんと早く行つて校門に待ち伏せして聞かう。先生はひどくダアウインを有難がつて居るやうだから、一つ一昨日聞いた進化論を片輪な論ですとたたき付けて、どうしても猿の一件は間違でしたと先生にあやまらせてやらう。

今朝は又格別な霜で、とてもかうして立ん坊をして居るのはやり切れない。おや先生がやつて来たぞ。

「先生、お早う。」

「ひどく早いですね。どうしたんです。」

「先生、今日はどうしても先生に聞かなければならないのです。」

「はあ、又例の猿ですか。」

「さうです。僕はどうしても猿では承知が出来ません。」

「大へんな見暮ですね。こんな所では駄目です。まだ誰も来て居ないから一つ職員室へ行きませう。」

ストーブの火がやうやくおこりかけて居る所であつた。先生が椅子を二つ持ち出した。

「お掛けなさい。では、猿と同じ仲間であつたとダアウインが云つたことの證據になるやうなお話をしませう。」

「先生、ちよつと待つて下さい。僕は考へましたのに進化論といふのは、段々

に親から子へとかはつて行くことを本にして立てた論ならば、片輪な論だと思ひます。」

「どうしてです。でもかはることがなければ何代たつても親と全く同じ人間ばかり出来て居るはずではありませんか。かはつて来るのは實際ではありませんか。」

「ですが、全くかはつてばかり居るものならば、似て居る人間といふのもないのでありませんか。どうしてもかはらない所があるから親と子とは似て居るのだと思ひます。かはるのが實際なら、かはらないのも實際ではありませんか。」

「さうですね。いや、全くかはつてしまふといふわけでもありません。大體はかはらずに、親の通りに傳はるのがほんとうですが、多少かはつた所が出来るといふのです。だから、かはつてばかり居るといふことを本にした論なら、なるほど、あなたのお考のやうに片輪な論でせうが、之れまでの人はかはるとい

ふことは、ちつとも考へずに、論を立ててばかり居ましたから、デアウインが、特に、其のかはるといふことを力を入れていつたまでです。」

中々先生はするい。中々にうまく僕をいひ伏せてしまつた。僕もさう云はれると反對するわけにもいかぬから、

「さう云ふ論ならそれで善いのです。解りました。が、若し片輪な論だとすると、そんな片輪な論から、人間の祖先は猿の仲間だといはれても承知が出来ないのです。」

「いや、御もつともです。其れでは、猿の仲間であつたらうといふ考の證據になるやうなお話にしませう。」

と先生が云つて居ると、

「お早う。」と、三年の受持の先生が入つて来たから、

「僕、では又お話は承りませう。御免なさい。」



と出て行つた。

「例の進化論をやつて居たのか。」  
と後で、三年の先生が云つて居るのが聞えた。

## 八 人間の祖先は猿の仲間だ (ハ)

猿の仲間になりたくないから、随分考へたが、とうとう猿の仲間にならなければならぬことになりさうだ。今度、先生が、その證據をりつばに立ててくれると、文句もなく猿に仲間入りしなければならぬわけだ。一體先生はどんな證據を出すのだらう。天照大神の繪を見ても、西洋の神さまの繪や彫刻を見ても皆、りつばな人間だ。お父さまは、ギリシアとか云ふ所に残つて居る神さまを彫つた彫刻は、人間の姿としてはほんとうに申分のないものだといつたことが

ある。お佛さまのお姿でも、あれ位ととのつた人間の姿はないと先生が云つたことがある。昔の吾々の先祖になる人は、今の人間と、ちつともかはつて居るやうに思はれないのに、先生は、どんな證據を知つて居るのであらう。

随分今日は温い。僕も晝のおやすみの時間に運動場でまり投げをして遊んだが、とうとう、一年生の子供の頭にぶち當て、泣かせて終つたから、何だか氣持が悪くなつて止して終つた。大きな生徒は直ぐに喧嘩を吹きかけて來るが、あんな小さな子供は、何でも泣いて駄目だ。機嫌を取れば取るほど泣くからほんとうにすまなくなつてしまふ。手もち無沙汰できよる／＼見廻して居たら號令臺に先生が、日向ぼつこをして居たから、直ぐに飛んで行つた。

「先生、猿の仲間であつた證據を見せて下さい。」  
「だし抜けにびつくりした。さうでしたね。」  
とにやり／＼して居る。

「さうだね。證據といつた所で、困るなあ。誰も見て居たわけでないから。しかし、學者に云はせると證據になるので、今此所で猿に子を生ませて人間になるからと云ふやうな目の前の證據ではありませんよ。」

何だか先生は言ひわけばかりして居るから、

「善う御座んす。學者にとつては、どんな證據があるのですか。」

「よろしい。其れではお話しませう。今度はね、又見方をかへてかう考へるのです。」

先生は、中々によく見方をかへる。

「理科で流水の作用といふものを五年の時に教はつたのでせう。どんな作用でしたか。」

僕はさういはれるとうろ／＼して、ちよつと考へなければ返事が出来ない。

「岩石を破壊することと、其れから、川下の方へ運ぶことと、其れを沈積する

こととでせう。」

「さうです。で、今の陸地の表面は、永い年月の間に、風や霜や氷などで碎かれ、又流水で碎かれた岩石を、川が次第に川下へ運んで、海の中へ沈めて行くこと、其れが海水のためにおされて固まり固まりして地層が出来るはずでしたね。」

なる程地層の出来るわけはさうであつた。

「今の陸地は、かうして幾千萬年の間に出来た地層から成立つて居るものだと云ふことは、地層といふ所で教はつたのでせう。」

教つた時には餘りよく解らなかつたが、さう云はれて見るとさうかも知れぬ。僕らの見る所は皆樹が生えたり、山の崩れた所は地層の目がよく見えたりするから、地球の出来た時のままの岩はないのかも知れぬ。しかし何でこんな地層の話など持ち出すのだらう。猿とどんな關係があるのだらう。

「所が、この地層の中に、その幾千萬年昔のものが、ちやんと残つて居るとすれば、其の残つて居る物を見て、その頃の世界の有様が想像されるのではありませんか。」

如何にもさうであらう。僕の家にも納戸の奥に、あん燈といふものがあるが、お祖母さまが、お前のお父さまの少い頃までは、こんな電燈やランプといふものがなくて、八疊の室の中にこんなものを燈して仕事をしたのだと話したことがあるが、随分うす暗いことであつたらうと思はれる。あんな古いものも、残つて居ると昔のことが、それでよく解るわけだ。

「現在、地層の中に残つて居るものは、つまり、石になつて居るものの他は無いです。他の木や動物など其のままでは、とても腐らすには居ないのでせう。木やなどでも、石にしつかりと形がついてちやんと残つて居るのです。」

「いつか地層の所を教はる時に見せて頂いた木の葉石のやうなもののことですか。」

「さうです。あれを化石といつたのでせう。其れから魚の骨の石になつたのも見たのでせう。」

「ありました。が、骨はあんなかたいものですからあのまゝで石ではありませんか。」

「かたくても、あのままで置いて御覽なさい。魚の骨でも猫の骨でも次第にはろく／＼になるのでせう。其れが幾百萬年経つてもびくともしないで、元の骨のままに居るといふのには、化石として地中になれば駄目でせう。それで、昔からの地層の中から出る化石を集めてずつと並べて見るとほんとうに昔からの生き物の有様がどうなつて居たかがはつきり解るのではありませんか。」

それは随分面白い話になつて來た。如何にも、昔からの生き物の化石を集めて見れば、どんな木があつた、どんな獸があつたとよく解るに違ない。しかし、

おかしいな。昔のものは、今あるものと違ふのだらうか。違つて居たなら、どんなものがあつたのだらう。

「その化石によつて調べて見ると、今から三百万年程昔の頃の化石に猿の仲間の骨が見え初めたのです。猿の骨はめつたに化石になつて居ませんが。其れから段々に猿の仲間でも現在居る猿に似た骨組のものが出来て、そこはよく解りませんけれども、大凡五六十万年位の昔と思はれる頃の地層から今の人間らしい骨が見えると云ふことです。」

おや、して見ると、

「先生、では、人間の骨は、それ位より前にはなかつたのですか。有つても残つて居ないこともあるではありませんか。」

「それもそうですが、しかし、猿の骨と人間の骨とは同じような石灰質のものでせう。猿のが残つて居て、人間のが残つて居ないはずがないではありません

か。」

考へて見ればその通りだ。ならば、それより前には猿の仲間であつて、次第に、あの變異によつて人間にかはつたのであらうか。ちやんと化石になつて残つて居ると云ふことになればそれは確かな證據に違ない。やはり先祖は、それでは、猿といふことになるのかな。

道理で、人間にも毛が生えて居るのだと、お隣りの兄さんのいつたことを思出す。まだ、人間の骨をよく調べると、ちやんと尻尾のあとが残つて居ると、お尻の所の骨を手でをさへて見せた。

さういはれて、猿を見ると、何處か人間を見るやうで、へんな氣もちがする。あいつのやることは、何だかこましくやられて居て、まるで人間の眞似ばかりして居るやうに思はれる。猿の物眞似と、僕らでも、物眞似の上手な人の悪口をいふ時に、よくいふものだが、猿が人間の眞似をするのでなくて、人間が、猿

のするやうなことを昔からするやうに出来て居るのだらう。大體、眞似といふものは、まるで、自分に力のない者では出来るはずがない。若し、猿が人間の眞似を何でもするものならば、よほど猿が僕らよりも上等に生れて居るといふことになる。よく大人は、小供の口眞似などをするが、僕らには、あんな、大人にするやうな上手なことを眞似しても出来ない。それでこそ大人だと思ふ。しかし、どう考へても、「僕の先祖は五十萬年昔の猿の仲間だね」と自慢をする勇氣はない。

しがし、何だか、どうもおかしいな。

よし、思ひ當ることがある。確かに、これはおかしい。

化石が、たとひ、どうあらうとも、一體、同じ猿であつて、人間になつて居るものもあるのに、まだやはり、猿もあるのではないか。同じ猿が人間になつたり、後に、ぼんやり／＼残つて猿のままに居るなどとは、けしからぬ話である。

る。

學校から歸へる道も、うるさく友だちが話しかけて來るのを、ふん／＼と聞きながら、其のことばかり考へて居た。どうしても解らない。

けれども、化石と云ふものを證據にして、とう／＼人間の先祖を猿にしてしまつた先生の手際は、うまいものである。僕の先生は、よく考方をかへるが、しかし、中々、どうして偉いものである。

夕御飯を頂きながら、珍しいことに、お父さまに、お晝の休憩の話をしたら「一方が人間になつて、一方が猿で居るといふのは、大へんな變異が、どうかした拍子に一方の猿の仲間につつて、一時に進化したものとしか考へられない。他の猿の仲間より頭が大きくかはつて智慧が出来たのだ。そして言葉をしゃべれるやうになつたのだ。今の猿の仲間の先祖と、吾々言葉をしゃべれる人間の先祖との間に、言葉のしゃべれない人間があつたのだが、その骨の化石が三

十年足らず前に、南洋のジャバ島に発見されて、明かに現在の猿と先祖は同じだが、別に進化して、今の人間が出来たのだと解つたのだ。」

お祖母さまは、おかしな話をするものだと思つて聞いて居た。僕は終に猿を先祖にしなければならぬのが残念で仕様がなから、

「ならば、今の猿は進化すると人間のやうになるんですね。」  
と聞いたたら、

「其れは誰も解るものはありやしない。」

「でも頭が大きくなれば智慧が出来て人間のやうになるのではありませんか。」

「出来ればであらうが、頭が大きくなるものかどうかが解りつこはないのではないか。なつて終つたものならば、先生のいはれるやうに化石によつてでも調べられるが、これから先きのことはどんな學者にだつて解るものでない。」

何だか、妙だ。自分勝手の論のやうだ。學問といふものは、先きのことは解

らぬものか。

「人間がこれより進化すればどうなるのですか。」

「其れも解らないさ。頭ばかり大きくなつて繪にかいた福助のやうになるだらうといふ學者もある。人間は、最早やこれ以上に、どうもかうもならないといふ人もある。なつて見なければ解らないではないか。」

どちらにしても、猿と同じ先祖をもつて居るのだと思はなければならぬ事になつてしまった。これでは學問といふものは、ちつとも、人間をひいきしてくれないのだ。仕方がないとするかなあ。

## 九 猿と人間とはどちらが兄か

「君の先祖は誰。」

九 猿と人間とはどちらが兄か

「僕の先祖は猿の仲間だ。」

残念ながら、かう答へなければならぬはめになつた。こんなことなら、先祖のことなど自慢げに持ち出す奴は、つまり、學問のない時代おくれといはなければならぬ。ちつとも名譽にはなるものでない。萬事こんな筆法で、これが證據だ、これ位の理屈の解らぬ奴は馬鹿だ、學問のない奴は話せない。もう一度一年生から教はり直して來いなんつていはれると、誠に残念だが、何だかそんな、人間の先祖が猿の仲間だと悪口を云つて得意がつて居る學問は、うれしいものではない。其んな學問は無い方がよほど名譽だ。

學問といふものは、體のよい悪口の辯護士をこさへる方法のやうなものだ。聖書の話などは、中々うまく出來て居て、人間の名譽になるやうにはかり書いてあるらしい。道理で、イエス様のお教だと有難がつて、ヤソ教に入る人が多い。

しかし、色々なことを、色々な考へて見ることは、大へんに好きである。猿が嫌だから、随分考へて、猿の取消しをしようと元氣を出したが、どうしても先生には勝てなかつた。悔しかつたが負けてしまはなければならなかつた。負けながらも、先生が色々な考へ方をかへて、うまく猿の仲間にしてしまつた手際には、ほとく感心して終つた。昔の戦ならば、敵ながら、あつぱれ／＼と、日の丸の扇をぱつと開いて、賞めなければならぬ所である。

もう、學問の前には、小さい名譽心などは捨てて、僕の好きなやうに考へ抜いて見よう。

猿であらうが、猫であらうが、さしつかえない。

いや、猿所ではない。人間の先祖は、便所のうじ虫の仲間だなんつて言ひ出して、利口さうに威張つて居る奴を、頭から冷水を浴びさせてやるのも、何だか胸がすくやうに思はれるのではないか。證據を出して見ると眞赤になつて怒鳴

つて來たら、「我輩の研究した所によれば……」なんつてすまし込んで、水も漏らさぬ論法で證據を擧げて、手きびしく説き伏せて終ふのも、男の子として、やり甲斐のある仕事ではないか。もう愚痴は止さう。

それでは、先づ〱人間の先祖は猿の仲間だときれいに承知して置かう。

然らば、僕の先生は教へる時、よく「然らば」と云ふので、僕の組の者は、「然らば先生」と名を付けて終つたが、然らば、其の猿の先祖は何であつたらう。

今急にそんなことを考へて見て解るわけのものでないが、ともかくも、人間と猿とは同じ祖先ださうだから、それを本にして考へて見れば何とか解りはすまいか。

同じ先祖から、一方は人間になり、一方は猿のままに残つたといふことを不思議がつてお父さまに聞いたのであつたが、人間になつた方は、どうかした拍子で、大きな變異が起つて、急に進んだのだと解つた。でも、猿の方だからと

て、少しは進んで居るのであらう。何にしても、人間と猿とで、どちらが先祖に近いか、似て居るかといふ事になれば其れは猿の方にきまつて居る。だから猿の方が古いわけである。どうしても猿は本家筋で、人間は分家である。兄弟にすれば、猿は兄である。かういつても、僕は今一かう、残念には思はない。古いものなどは、有難がつて居ても仕様がなから。學問の上から云へば、そんなものは何でもない。唯理屈に合つて確かな證據がありさへすればいいわけである。

所が、おかしいのは、本家にあたり、兄さまにあたる猿の仲間が、弟の人間よりも勢がなくて、玩具扱ひにされることである。段々にかうなつて行けば、とても猿の連中は、本家だ兄だと威張る所か、返つて、人間のために追ひ拂はれるやうになるのではあるまいか。

お祖母さまが田舎に居た頃には、猿の仲間も随分、人の家の近くまで出かけ



て来たが、今頃は、ほんとうの山奥に行かなければ居ないと話したが、そんな風だとすると、猿も居所が次第に狭くなつて行くことになるだらう。

日本には年々五十万人の人が多くなつて行くと先生が話したことがあるが、それならば、今まで人の住まなかつた山の方にも、どうしても、人が多く行くやうになるから、又獵師などもたくさんになるから、猿の仲間も、住む所が狭くなつて終ふにきまつて居る。地理の時間に北海道のアイヌ人の話を聞いた。本は日本の大抵な所に住んで居たのを、瓊々杵尊が高千穂の峯に御降りになつてから、神武天皇を殆めとして、日本武尊や、坂上田村麻呂や安倍の比羅夫などが、北へ／＼と征伐して行つて、とう／＼今日では北海道で二萬人足らずになつて、毎年人数がへる一方なので、政府でも大事に保護するやうになつて居るさうだ。同じ人間でさへそんなやうなことだから、ことに猿などになれば、なほさら、へるのではないだらうか。商賣の品物のやうに、古いから流行らな

くなるのかな。

古いものが流行らないのがほんたうとすると、どうしても猿は人間よりか古いのだから流行らなくなつて終ふのに違ひない。

これは一つ、先生に尋ねて見よう。今度は三日ばかりだまつて居たから、先生、きつと僕が降参したものだと思つて居るに違ひない。いや、猿の一件は降参したが、尋ねることは、降参どころではない、僕も先生にもまれたから、少し上手になつて居る積りである。

## 十 猿は古いから流行らなくなる

「先生、人間と猿とは、同じ猿の仲間が先祖なら、どうしても猿は古いわけですね。」

と聞いたら、先生は暫く考へて居たが、

「なる程ね。あなたは随分考へたものですね。猿が古いと氣がついたのはさすがに偉い。如何にも猿は人間よりも古いのです。つまり古くから棲んで居た動物です。なる程ね。」

と、何だかしきりに感心して居る。それではも一つ感心させてやらう。

「僕はね、猿は古いものだから流行らなくなつて終ふのだと思ひますが。」

「流行らなくなるとは。」

「段々に勢がなくなつて、隅つこの方へ追ひやられて終ふことです。」

先生は、ぼんと膝をたたいて、

「なるほどね。猿が流行らなくなるとは、よく出来た。ほんたうにあなたは、手を上げましたよ。よく考へましたね。この頃二三日だまつて居ましたが、その間、ずつと考へて居たのですか。」

果して感心は、してくれたが、その流行らなくなるのがほんとうかどうか解らない。

「ほんとうに流行らなくなるものでせうか。」

「でも、ほんとうでせう。化石によつて見ても、昔あつて、今日はなくなつて終つて居る動物などもあるのですから。吾々人間の先祖になる猿人も、現在では地球上には何所にも居ないが、化石として、ちやんと残つて居る所を見れば、昔あつて、今は其の種族が絶えてしまつたと見るよりほか、考へやうがありません。さうすると、丁度、あなたがいふやうに、商品の流行のやうに、古いものが段々にすたれて、新しいものが代はることになるのですね。」

僕には、その流行らなくなるわけが解らないのだ。商品が流行らなくなる理由も、ちつとも解らないが、まあそれはそれとして、古い猿などがなくなつて行くのは一體どうしたものであらう。幾百年も生きて居る猿が死ぬるのはそれ

は、年寄りになつて死ぬるといふのだから不思議でもないが、昔から棲んで居ても、ともかくも、その子、その子と代々新しい子供が出来て行くのに、それが段々に繁昌しなくなるといふのは、おかしい話である。

「どうして、古くから棲んで居ると、繁昌しないんですか。新しい子供は、幾らでも出来るのではありませんか。」

「あなたは、中々、どうして、まるで、學者のやうだ。そう、問ひつめられるところからも困つて終ひますね。」

と、腕組を、しなほした。これは、先生、ほんとうに困つたのかなと思つて居たら、

「前に、ダアウインのお話をしたのでしたね。ダアウインの有名な、自然淘汰といふ説は、全く、あなたの今のお問ひになつて居る事にお答へする爲めに立てられた説です。ダアウインは、同じ先祖から出た、例へば、人間と今の猿類

とのやうに、生き物が、こんなに、種々な生き物にかはつて来て、古いものから、古いものからなくなつて行くのは、自然淘汰の結果である。即ち、生物の進化は、実際には、自然淘汰によつて行はれたのであると説いたのです。」

自然淘汰つて、何のことだか僕には解らない。

「自然淘汰つて、何のことですか。」

「つまり、古いものは流行らなくなるといふ事です。色々様々な生き物が、地球の上に棲んで居ませう。所が、其の棲んで居る周りの様子に、うまく合ったものは、益々繁昌するが、合はないものは段々になくなつて行くのでせう。」

うまく、周りの様子に合ふといふのは、どんなことか解らないな。と、不審さうな顔をして居たら、

「讀方の本に、動物の體色といふ課があつたでせう。保護色や警戒色の事が書いてあつたのではありませんか。」

「ありました。」

「あれらは、何のためにあつたのですか。」

さうだな。保護色は自分の身體をまもるためであつた。警戒色は、これも、つまりは自分の身をまもるためであつた。

「皆、自分の身體をまもるためでした。」

「うまく化けおほせた奴が敵の手から逃れ、又、敵をおそふのに都合がよかつたのでせう。」

だから、保護色のうまく出来て居ると、出来て居ないので、どちらが後にまで残ることになりますか。」

「それは、保護色のある方です。」

「だから、保護色一つでも、あつた方が、繁昌することになるのでせう。」

もつともな話だ。日本兵がカーキ色の服を着て居たのは、満洲はカーキ色の

土で、あそこで戦するには、あの色の服を着て居れば敵の目にたたないから、隠れるのにも、敵を攻めるのにも、都合がよかつたと聞いたことがある。やはり、あんな色だけでも、自分の身體を安全にすることになるわけである。

「其れから、獅子や虎などのやうな強い身體や、牙や爪のやうな武器をもつて居るものと、羊のやうな弱い身體や、そんな立派な武器をもたないもので、どちらが繁昌するかは解り切つたこととせう。」

それは強いのが繁昌するにきまつて居る。

「蛇やなどのやうな毛も何もないものは、暖い所に棲むのがいいか、寒い所に棲むのがいいかも解りませう。」

「無論、暖い所でなければ、死んでしまひます。」

「だから、その土地の氣候に適したものは繁昌することになります。こんな様なわけで、生き残つて榮えて行くのに都合よく出来た生き物は、段々に繁昌

し、反対なものは、自然になくなつて行くことになるのではありませんか。」なる程、さうなるわけだ。身體も元氣に、武器も恐ろしいのもつて居り、氣候にも合ふやうにといふ工合に、すべて、うまく出来て居れば、必ず繁昌するのには、きまり切つたことだ。

「ほんとうにさうです。」

「都合の善いものが自然に残り、都合の悪いものが自然に、はぶかれて行くことが、自然淘汰と云はれるのです。で、この自然淘汰によつて、都合よく出来たものが残り、又それよりも都合よく出来たものが、更に後に残り、かうして、ほんとうに生活に最も適したものが、最後まで残ることになります。だから、生き物は、自然淘汰によつて進化して來ることになります。」

なるほど、自然淘汰のわけは解つた。

「解りました。さうすると、後に残つたものほど、つまり、上等な生物といふ

ことになりますか。」

「さうです。自然淘汰によつて下等なものは次第に滅んで行つて上等なものほど後に榮えて行くから、上等なものになるのだから、進むのです。進化です。反対なら退化でせう。」

其れで、自然淘汰は解つたが、しかし、おかしいな。僕は、古くから棲んで居ると、なせ流行らないかと先生に問ふたのであつたが、今の自然淘汰のことなら、古くから棲んで居るものでも、生活するのに適して居さへすれば、残るはずである。猿は人間より古くても、生活に適して居さへすれば、人間より後まで榮えるわけである。古いから流行らなくなるといふことは、自然淘汰とは何だか縁のないことのやうだ。おかしいな。

「先生、自然淘汰のことは解つたやうですが、しかし、おかしいです。僕は、古いから流行らなくなるのはどうしたわけかお尋ねしたのですが、古くても、

生活に適して居さへすれば、新しく出来たものよりも後まで榮えるのではありませんか。古い新しいと云ふことは、自然淘汰と縁があるのですか。」

「おや、さうでしたね。古いから流行らないと云ふことをお尋ねになつたのでしたね。是れはどうもうつかりして居ました。」

さうですね。今ある生き物はともかくも後に残つた、自然淘汰の結果残つたものであるとお考へになることが出来ませう。」

「さう考へられます。」

「さうすると、人間のやうに新しく出来たものでも、若し、生活に適して居なかつたならば、榮えずに滅んで終ふのでせう。だから、新しく出来たもので今榮えて居る生き物は、皆、生活に適したものだ」と云ふことになるのでせう。」

もつともな話である。適して居るから榮えて居るわけである。

「さう思はれます。」

「若し、少しでも、古いものよりも適して居ないものならば、古いものは、永らく地球に住んで来て、うまく生活することにも慣れて、そして随分数がたくさんになつて居ますから、新しいものが、勢を振ふことは出来るものではありますまい。」

其れは、よく解る。僕の組にも、他の學校から来た生徒があるが、中々、腕も強いけれども皆が大勢で、ちつとも威張らせない。よほど、人並つと勝れて居なければ、古い、前から居る生徒の中で威張ることは出来ない。やはり新しいものは、損をすることになる。

「現在、榮えて居る生き物は、古くから居たものよりも、非常に勝れて居た爲めに、榮える事が出来たとしか考へられませんか。」

つまり、新しく出来て、榮えて居る生き物は、古から榮えて居るものよりもよほど、生活に都合よく出来て居るものばかりだと考へてさしつかえないと思

ひます。」

さうだ。出来たてから古いものよりもよほど上等に出来て居たので、古いものを押しのけて榮えたに違ない。さうすると人間も、出来たてから猿などよりも、ずつとりつばに出来て居たのだと云ふわけになる。

「だから、新しく出来た現在の生物といへば、自然淘汰によつて、今日に榮えて来て、これから先きも、自然淘汰によつて榮えて行くと思われませう。新しいものが流行るのには、ちやんと、さうした原因があることになります。」  
其れならば、古いものは流行らなくなる道理だ。猿も古いから流行らなくなるはずである。

「よく解りました。」

今日は随分長く話したが、先生は、やはり偉い。中々のことで、困らない。困つた様な顔をして居ても、とても困らない。しかし、僕の考へたことも、つ

まりほんとうだといふことになつた。

先生は、中々考へ方の手を上げたとはめてくれたが、考へごとといふものも、面白いものである。

解らない時には、相當苦しいものだけれども、解つて來ると、その嬉しさは、何とも云へない。

## 十一 猿よりも古いものは居ないか

どうしても、猿は人間よりも先祖に近いもので、先祖に近いだけに、自然淘汰の理屈より見て、早く流行らなくなるはずのものである。

早く流行らなくなるとすると、早く滅んで終はなければならぬはずである。と云つた所ではから先きのことは、どうなるものか、なつて見なければ解るわ

けはないのだが、しかし、猿の仲間も、ともかくも、まだたくさんに棲んで居るのは事實である。古いものでも、新しいものと一所に棲んで居るとすれば、猿よりもまだ古いものでも、たくさんに残つて居るものがあるかも知れない。学校の生徒が、卒業したり、上の級に進んだりするやうに、一所に出て行つたり、進んだりするものもあるが、お父さまや、お母さまが出来たからとて、お祖父さまや、お祖母さまが、急になくなつて終つたり、赤ん坊が出来たからとてお父さまや、お母さまが急になくなつて終つたりなどしないのと同様に、新しいものが出来ても、古いものが、やはり残つて居るものもあるはずである。僕のお祖父さまのお祖父さまは九十六まで生きて居て、死ぬる前の日までびん／＼働いて居たとお父さまが話したことがあるが、其んなに長生きすると、自分の子が死んで、孫が死んでも、やはり生き残つて居ることもあるはずである。生き残つて居るものは、生活に適して居るわけだ。

すると、おかしいぞ。猿は古いから流行らなくなると、昨日、先生との相談で、きめたのであつたが、猿より、もつと古いもので、僕のお祖父さまのお祖父さまのやうに、今もびん／＼して居るものが、たくさんあるかも知れない。

齒磨楊子をくはへて井戸端に出て見ると、お隣りの屋根からお日様がぱつと来た。うろたへてポンプの柄をがたこん／＼やり出すとお隣りの裏口から、お隣の兄さんが、ひよつこり出て来た。やはり、洗面盥をさげて居る。

「お早う。」

「いや、お早う。君の方も試験が始まつたらう。」垣根越しに質問して来た。兄さん、この頃は試験のため、随分勉強家になつたなと、僕は毎朝、二階を見上げて居たのだが、今朝も、ちやんと二階は障子になつてゐる。

「ええ、やつと一昨日からです。兄さんはこの頃は随分朝起きですね。」とやつたら、



「冷かすなよ。君、これで一生けんめいなのだ。まあ、半分ばかりはすんだんだが。」

兄さんも、がたこん／＼始めた。

「兄さん、では、一つ僕が理科の試験問題を出しますから、答へて下さい。」

「生意氣なことをいふな。よし、答へよう。出し給へ。」

「猿より古い動物は何か。」

「何、猿より古い動物、古いといふと、猿が出来る前に出来て居たといふことか。」

「さうです。」

「さうだね。トカゲなどの類だね。今石炭になつて居る樹が、地球の上に随分たくさん生えて居た頃には、トカゲなどの六丈もあるやうなのが棲んで居たのだが、其の頃には、まだ牛や馬や猿のやうなものも居なかつたのだね。」

「どうして解るのですか。」

「やはり、化石をしらべると、其んなものの骨が出て来るから解るさ。」

二人が口一杯にふくんで居た白い唾をぶつと吐いた。そして思ひ出したやうがたこん／＼を始めた。

「満點だ、兄さんは。」

「お安い満點だね。君を先生にするといいい。」

と面を洗ひ始めた。

僕も急いで洗つて家に入った。

猿より古いものは、トカゲの類だとお隣りの兄さんはいつた。まだ猿の居なかつた頃に、そんな大きなトカゲなどが居たのか。さうだ、石炭を教はつた時に、ちよつと、掛圖を見たことがある。大きなトカゲのやうなものが、水の中から半分程からだを出して居るのもあれば、空を飛んで居るのもあつたやうに

覺えて居る。あんな頃には、まだ猿やなどなかつたのだとすると、勿論人間もなかつたはずだ。

しかし、六丈もある様なトカゲが居たと云つたが、今でもそんな大きなトカゲが居るのだらうか。空を飛ぶやうなものが居るのだらうか。もつとも蛇の大きなのは、よく印度やなどでとれたのを動物園へもつて来るから知つて居るが、トカゲは見たことがない。羽の生えたのも知らない。今日は又先生に聞いて見やう。

お晝のお休みの時間に、二階から見てもたら先生が運動場へ出て來た。それと早速飛んで下りた。

「先生、先生。」

先生は又にやり／＼笑つて居る。

「先生、猿より古くから棲んで居るものにトカゲがあると、お隣りの兄さんが

今朝話しましたが、そんな古いトカゲが、今でも棲んで居るのですか。」

「今度は猿の先祖の研究ですか。トカゲ、なる程、昔トカゲの盛んな時代があつたのですが、その頃のトカゲは随分大きかつたのでせう。」

「え、お隣の兄さんも、さういつて居ました。六丈位なのが居たと。けれども先生、今頃は、そんな大きなのは、居ないのではありませんか。動物園でも大きな蛇は見ますが、トカゲは見ませんね。」

「今は何所にも、そんなのは居ますまい。つまり、今あるやうな、小さいトカゲや蛇などが生き残つたのでせう。」

「どうして、なくなつて終ふのでせう。なくなるのは、生活に適しなくなるからでせう。どうして適しないのでせう。喧嘩しても今のやうな小さいのよりも強いではありませんか。」

「さあ、どうですかね。そんな大きな身體をして居た割りに、頭が小さかつた

のでせう。食べ物はいくさん要するのに、あまり利口でないと来て居る所へ、何か大きな、地上のかはりでもあつて、例へば石炭になつて居る樹など盛んに生長して居たものがあつて土地に埋れて炭になつて終つて居るのですから、何か大きなかはりがあつたと見られるのですが、そんなことのために、あの大きな身體がもち切れなくなつて、自然に後が絶えたのではないかと考へられます。始めは生活に適して居たものが、土地のかはりのために適しなくなつて終つたのでせう。』

さう聞けば、さうも考へられる。馬鹿の大飯喰ひと云ふ事があるが、其の頃のトカゲの類は、皆それであつたのだらう。

猿よりも、トカゲが古いといふのは、つまり、そんなものの化石のある土地が、猿の化石のあるのよりも古い所から考へられるのであらう。

それならば、大體、猿はトカゲの進化したものと見られるのだらうか。それ

とも、他のものから出来たのであらうか。猿より古い動物がトカゲだけしかないものならば、でも、猿はトカゲからかはつて来たものだといはねばなるまい。

「先生、猿より古い動物は、トカゲしかないのですか。」

「さあ、未だありません。蛇の類もさうでせう。蛙、山椒魚などもさうでせう。おかしいな。ならば、猿は、どれの子孫になるのだらう。」

「一體猿は、其の古いものの、どれから進んで来たものでせう。」

「さあ、どれからでせう。解りませんね。ともかくも、蛇やトカゲや、鱈魚やなどの類が、先祖になることは明かですが、其の中のどれからか、確かに私には解りません。」

愈々、先生も知らないと云つた。先生が知らない位だから、むづかしい問題に違ない。どうして、そんな類の中の、どれかになると解るのだらう。猿が人

間の先祖だと聞いた時には、ほんとうに嫌だつたが、蛇の類が猿の先祖となれば、一そどうも嫌だ。僕は、蛇にしたつて、トカゲにしたつて鱈魚にしても、見てさへぞつとする。

又君の先祖とは聞かれて猿、猿よりも先祖があるだらうと來られて蛇、とは、まさか答へられないではないか。「吾こそは箱根山中に棲んだ大猿の千二百代の後胤……」とは名譽な名乗りでないかと考へたことがあつたのに、蛇の類とは全く嫌だ。しかし、嫌だといつても、學問の上から證據を出されては仕方ないことである。どんな證據があるのだらう。

「蛇の類が猿の先祖だと云ふ證據があるのですか。」

「やはり化石の上から見て、蛇類が榮えた後に鳥の類と、カモノハシと云つたやうな、ちよつと鳥に似た獸の類が出來て、次にカンガルーのやうな子袋のあるものが出來て、次に、犬猫とも鼠やなどとも、或は牛馬か猿とも區別のつか

ぬものが出來て、それが、段々にはつきりと、今の獸の類に別れて來たのです。だから、どうしても鳥や獸の類の先祖は蛇の類でなければならぬといふことになるのでせう。」

又化石で證據を立ててしまつた。證據があるといはれて見れば、どうすることも出來ない。

ついでだ。其の蛇の先祖も聞いておかう。こんなことでは、前に人間の祖先は、便所のうじ虫だといつて人を驚ろかしてやらうなんつて考へたことがあつたが、本當にそんなやうなことになるのかも知れない。

「解りました。では其の蛇の類の先祖は何です。」

「蛙の仲間です。山椒魚などの類です。」

「其の先祖は。」

「肺魚といふうきぶくろで呼吸をする魚の類。」

「其の先祖は。」

「普通な魚の類です。」

遂に魚になつた。魚は僕の先祖か。しかし、こんなことになつてはもはや癩にはさはらなくなつた。全で人を馬鹿にしたやうな話だ。何だか、おかしくなつて仕様がなない。學問といふものは、理屈ばかり云つて、物をこちつけるのが仕事だと誰かの話を聞いたことがあるが、實際、こんなのを屁理屈といふのだらう。魚が僕らの先祖なら僕は毎日のやうに先祖のからだを食べて居るわけだ。これ位の大不孝があらうか。へんてこなことになつて行くものである。先生も、何だかおかしいぞ。

「先生、では、僕らは毎日、先祖である魚を食べて居るわけですね。大の不孝者ですね。」

といつたら、聞いて居た皆が、わつとはやし立てた。

「如何にもね。しかし、何も、食べられる魚が吾々の先祖ではないのでせう。

猿の話の時と同様に、今の魚の類と同じ體の造り方になつて居た先祖があつたので、今の魚も、恐らくはそれから出て、あまりかはりもせず今日に至つて居るといふに過ぎません。いはゞ、親戚であるわけです。けれども、先祖と姿がまるで、そつくりだとあれば、それを食べるなんつて、決して氣持の善いものではないのでせう。はゝゝゝ。」

先生も笑つた後で、小首をかしげて、ちつと考へ込んで居る。

「先生、では、魚の先祖は、今度御尋ねませう。」  
と逃げだした。

魚の先祖と云へば、きつと、つまらないものにきまつて居る。魚の先祖になるものが、やはり今まで住んで居るのだらうか。

## 十二 生き物のほんとうの先祖は何か (1)

どうせ、聞いて見た所で、魚に、ろくな先祖のあらうやうがない。ないのは解つて居るが、このまゝだまつて終ふのは卑怯である。いや、ろくな物か、ろくでない物か、つまらないものか、つまる物かは、最早や、學問を調べる上の問題ではないと、ちやんと、前に考へて置いたはずである。僕らは、ほんとうの理屈になつた説明が、何についてでも出來さへすれば善いのである。

しかし、實におかしいものである。魚の類が僕らの先祖とは、ちつとも當にして居なかつた。これからは、どんな先祖が飛び出すのか知らないが、そんなことに、びくともしてはならない。

何にしても、學問といふものは、よく出來たものだ。とう／＼化石で人間の

先祖を調べるなどとは、よく考へついたものである。

雨上りのお天氣の善い日である。職員室を見ると先生、一生けんめいで、考查のお點をつけ居る。早く出て來ると善いになあと、のぞいて居たらちらつとこちらを見たから、

「先生。」

と呼びかけた。答案の中へ朱筆をはさんでおいて、こと／＼と出て來た。

「何。」

「魚の先祖は何ですか。」

「おや／＼、どうも出會頭に。全で、試験をされるやうだね。」と頭をかいて居る。

後から出て來た五年の先生が、

「梶山さんは、中々熱心ですね。」

と僕の頭を押へてのぞき込んだから、

「先生、僕の先生は、僕らの先祖は魚だとおつしやいますが、お佛さまを信心する人がお魚を食べないのは、御先祖様であるからですか。」

「これや／＼、大へんな話になりましたね。魚が僕たちの先祖ですか。へええ、なる程ね。」

道理で坊さんなどはお魚を食べない。不孝な話ですからね。驚いた。」

一人で驚いて居る。

「梶山さんは、中々どうして、恐はい人間だ。いや、勇將の下に弱卒なしつてね。」

と僕の先生の肩をたたいた。

「は／＼／＼」と僕の先生は笑つて、

「僕も、毎日／＼試験されるのには弱つた。随分論鋒が鋭いからね。」

「先生、お魚の先祖は何ですか。」

先生は腕組して、

「ちよつと待つて下さい。え／＼と。」

お魚の先祖は、クラゲの類ですがね。といった所で、又では證據を見せて下さいと來るでせう。今度は、その證據といふものがないので、困るのですが……。」

「クラゲの類ですか。」

僕も驚いた。まさかクラゲの類が魚の先祖とは思はなかつた。一體、どんな證據があるのか。と先生に問ふと、又證據を見せて下さいと來るから困るといつたから、問はないことにするが、證據がないといふのは、化石がないと云ふことであらう。化石がありさへすれば、すぐに、ちゃんと化石になつて残つて居ますと、僕に、ぐうの音も出させないのに、今度は、證據がないから困ると弱音を吐いて居るから。

「しかし證據がないのに、クラゲの類ですといふのは、どうしたわけか。何を本にして、そんなことをいふのか。僕らにとつては、大問題だ。證據のないものを君の先祖はクラゲだといはれてふん／＼聞いて居れるものでない。」

「證據のないものを、どうしてクラゲの類だといふのです。」

「さあ、困るね。……」

「證據のないとおつしやるのは、化石がないことでせう。」

「さうです。化石は魚の類まで位しか、はつきりと解らないのです。クラゲやなぞのものないことはありませんが、魚なぞのやうに骨がありませんから、明らかに、證據として立てるほど、ないのです。つまり、證據はないが、赤ん坊の時から大きくなつて行く順序を見ると、魚やその他の脊骨のある動物の大きくなつて行く順序と、非常によく似て居るから、多分、魚の類は、クラゲやホヤといふ海綿に似たものがありますが、そんなものから出来たのだらうと、考へ

るのです。」

しかし、考へるといつた所で、考へたから、さうだといふことは出来ないわけだ。證據があつて、始めて、ほんとうだといへるのだから。

「唯、似て居るから、クラゲからかはつただらうといふならば、確かな話ではないのですね。」

「無論、誰も見て居たわけではないから、確かであるか、どうかは、解りませんが、しかし、どうしても、確かだと考へるよりほかに、考へ方がないので、それから仕様がありません。」

一體、それより他に考へ方がないといふのは、どうしたわけだ。

「何故、確かだと考へるより他に考へ方がないのでですか。解らないものは、ちつとも、確かでないはずではありませんか。」

「いや、さうはげしく切り込んで来られると少々困るが、前からの問題であつ



た進化といふことは確かだとして善いではありませんか。人間は必ず其の祖先があるはずで、其の祖先から次第にかはつて人間にまでなつたのである。即ち進化によつて今の生き物は出来たのであると云ふことは。」

「昔から進化して来たものだといふことは解つて居ます。」

「それから次には、進化の早いものと、遅いものがあつて、即ち同じ猿の間を先祖として出来た人間と猿とでは、人間は非常に進化が早く、猿は遅くて、やはり先祖とさうかはらずに居るといふやうに、而も、一所に地球の上に棲んで居るといふことも確かでせう。」

「え、確かです。さう考へます。」

先生は、一體、僕をどう云ふ風に降参させやうといふのだらう。

「進化といふ事が確かで、進化の早いものと遅いものが、同時に地球の上に棲んで居ることが確かだとすると、例へば此所に魚の仲間があるとすると、こ

の魚の仲間は何か先祖があつて進化して来たものだといふことは信用しても善いのでせう。又、其の先祖に近い生き物が地球のどこかに生き残つて居るといふことも、満更ないことだと考へられないではありませんか。」

それに違ない。生き物には必ず親があつて、同じ親から出た生き物が、新しい生き物と一所に生きて居ることは、あるはずである。

「その通りです。」と答えたが、先生のいふことを一々御もつともですといつて居ると、お終ひには必ず降参しなければならぬことになるにきまつて居る。

「さうするとね。……………」

と先生が次をいはふとして居ると、かん／＼と午後の一時間の始まる鈴がなつた。

「では、又今度に致しませう、さよなら」

「さよなら。」

と教場に向け込んだ。

化石の證據がなくなつたら、今度は、理屈で説き伏せやうとやつて来た。理屈ばかりでは降参すまいと考へても、進化といふことは確かなことでせう、古い生き物も、新しい生き物も一所に棲んで居ることも事實でせうと來るから、否や、さうでないといへなくなつて終ふ。先生は、ほんとうによく手をかへ、品をかへて、論を進めて行く。しかし、考へ方といふものも、中々、色々あるものだ。

幸に、午後の一時間は理科だ。質問はと來たらすぐ持ち出さう。

今日は、一時間中講義ばかりして質問はと來なかつた。では休憩時間だ。先生の後を追つて階段を下りて、

「先生。」と大聲を上げたら、くるつと振り向いた。

「先生、此の前の續きをお願いします。」

とかけつけた。

「あなたには、ほんとうにうんと油をしばらくられるね。あれにね、もう一つ。親と子といふものは、親子でないものよりも、よく似て居るのでせう。だから聞いても解らない場合には、一等よく似たものを親と子だとして、大きな間違ではないといふことです。」

僕を人が見ると、でも、お母さまによく似て居ると見えて、これは梶山さんのお坊つちやまでせう。なくなられた奥様そつくりだと、よくいふ。他人よりか、お母さまに似るのはあたり前のことである。

「それはあたり前のことです。」

「いや、それだけ三つのことを承知して居ればね、かう考へて來るのです。魚には脊骨があつたでせう。そして、其れを先祖として來た蛇の類も、蛇から分れた鳥の類と獸の類も、最後の人間になるまで、脊骨が段々にりつぱになつて

行つたのでせう。」

如何にもその通りだ。

「さうです。」

「だから、こんな脊骨のある類のものは、貝や、イカなどのやうな、外には殻を有つて居ても體の軟いものや、カニや、バッタやなどのやうな外側は随分丈夫に出来て居ても、中に骨のちつともないものやなどは、別に進んで来たのだと考へられませう。つまり、體の造り方が、何だか似て居ないのでせう。」

さうだな。貝やカニなどは外に殻を着るやうにはかり考へて来て居るのに、鳥でも獸でも内側に骨をこさへて来て居る。違ふといへば違ふやうだ。

「似て居ないものの方から魚の先祖を探し出さうとしても駄目ですね。」

「さうです。」

「魚でも、下等なものになると骨が段々に軟くなつて來ますが、例へばアカエ

ヒなどのやうに。軟くなつてもやはり骨はあるのに、カニやなどは相當上等になつて来て居ても、ちつとも體の内側に骨が出来ようともしないのでせう。だから、どうしても、魚の類は、貝やイカの類やカニやバッタの類からは別に進んで来たものだと見ねばならないのです。」

何だかむづかしくなつて來たが、さう聞かされれば、さうとも思へる。

「かうして段々に調べて行くと、タコやカニの類も、魚の類も先祖は、同じ、クラゲや、イソギンチャクやサンゴの類から出て居らねばならぬと解つたのです。」

「誰が調べたのですか。」

「こんなことを調べる學問を動物學といふのですが、動物學者が、進化論を本にして、生き物の先祖を先祖をと、現在棲んで居る生き物の中から探し出して、とう／＼さう解つたのです。」

随分、そんなことは、骨の折れる仕事だらう。先祖に似たものが棲んで居ないとする、それは、ほとんど調べる方法がないことになるわけだが、やはり、そんな古い先祖に似たものも棲んで居るから妙だ。

「ならば、先祖に似たものが棲んで居なかつたらば調べることは出来ませんね。」

「化石は、なくなる。先祖に似たものは居ないとする、むづかしいものです。しかし、も一つ調べる道があるのです。」

幾らでも抜け道がある。ほんとうに學問といふものは、水も漏らさぬやうに御丁寧に考へて行くものと見える。

「昔から、赤ん坊は、十月の間お母さんのお腹に入つて居るのだと申しますね。」

何だか知らないが、お祖母さまやなどが、よくそんなお話を、お隣りのおばさんとして居ることがある。向ふのお嫁さんは來月がお産ださうだが、ひよつとすると一月位のびるかも知れないと話して居たから、おばさんが歸つてから、お産が來月だとどうして解るのですかとお祖母さまに問ふたら、赤ちやんはお母さまのお腹に十月の間入つて居るのだと聞かせてくれた。いつ入つて、十月の間お腹に居るのか知らないが、十月入つて居るのだといふことは聞いて知つて居た。

「そんな話を聞いて居ます。」

「お腹に入つた始めから、あんな赤ん坊で居るのではなくて、始めは、鶏の卵も同じことで、針の先きでついたやうな小さいものが、段々に數がたくさんになり、形が出来て、お終ひにあんな赤ん坊になつて出て來るのですが、それは、鶏の卵を温めて、かへすまでに、段々にかはつて來るのと大抵同じことです。」

それはおかしな話だ。それでは始めからあんな赤ん坊で居ないのか。しかしどのやうに針の先きでついたやうでも、ちやんと頭もあれば手足もあるはずだらう。それが、ただ、大きくなるといふまでであらう。

「どんなに小さくても、頭も手足も、ちやんとあるのでせう。」

又、かん／＼と始まる鈴が鳴つた。

「では、又、お話ししませう。」

と先生は、うろたへて職員室へ逃げて行つた。

### 十三 生き物のほんとうの先祖は何か (四)

一體、お母さんのお腹の赤ん坊が、どうしたといふのだ。それは入りたては、小さい針の先きでついた程のものであらうが、それは段々に大きくなつてく

のに不思議もない。そんなことを持ち出して、先祖の先祖を調べる道だと云はうとするのだらうか。先生のやることは、大體まはりくどいことばかりで、ほんとうに、じれつたくなつて終ふ。こんなことがあると始からいつてしまへば善い。遠い所から話しかけて、必ず僕を降参させて終ふから悔やしい。

「おい義雄ちやん。今日、學校がひけてからね、ちよつと僕を待つて居てくれませんか。」

「何所で待つて居るの。」

「教場で善いさ、僕と一所に。」

「何するの。」

「僕、ちよつと先生に尋ねたいことがあるのだ。」

義雄ちやんは校舎の壁によりかゝつて、

「君は随分先生に尋ねるね。僕の兄さんがね、梶山君は學校でも、あんなに先

生に物を尋ねるのかと聞いたから、しよつちう聞いて居るといつたら、では、随分先生も困つて終ふことがあるだらう。あんな生徒に出會つては、先生もやり切れないだらうと話して居たよ。」

「そんなこといつて居たの。待つて居てくれるか。」

「よし〜。」

相談がついたから課業がすむとすぐに先生を呼び止めた。

「赤ん坊と、先祖調べと、どんな関係があるのですか。」

「え、又とつつかまつたね。さうね、赤ん坊は始めは、全で頭も手足もない、針の先きでついたやうなものです。それが二つに割れ四つに割れして、段々に数がふえると共に、形もかはつて来て、脊骨になるやうな筋が出来たり頭のやうになつたり手足のやうなものが出来たり、終にほんとうの赤ん坊の形になるのです。そのかはつて来る途中は、魚のやうにもなつたり、オタマジャクシ

のやうにもなつたり色々にしてほんとうの人間になるのです。短い十ヶ月の間に、まるでかはつて終ふのですが、それは、長い間何億年とか、つて人間が出来たまでの進化の有様を皆見せて来るといふのです。」

「そんなにお腹の中ではあるのですか。それではお腹で猿になつたりなんかするのですか。」

「まさか猿にはなりません。どれにも、よく似た形になつてはかはり〜するのです。ですから、その十ヶ月の間のかほりを見て居ると、大抵、人間になるまでの有様が解るといふのです。」

おかしいものだ。お腹の中で、進化するとは奇妙なことがあつたものだ。それならばお母さんのお腹をエックス光線で毎日見て居れば、よく解るわけだ。とするとわざ〜化石をあつめたり、他の生き物を比べて見たりしなくても善いはずではないか。

「では、お母さまのお腹さへ毎日々々眺めて居れば、進化して来たことは解るわけですね。石や土の中から化石やなど掘り出さなくとも。」

「全くさうも行きません。化石やなどで研究した事と、お腹の中ではつて行くこととよく似て居る所からお腹の中で進化の有様が見られるといふ事になつたのですから、大體は、外で調べるのが本です。それにお腹でかはつて行くのは、はつきりとした形にならずにかはりくしますから、赤ん坊ばかり見て居ても仕様がありませんが、大凡の所は解るのでせう。」

はつきりした所は解らなくとも、ともかくも面白いことが解つたものだ。それでは、お腹で一番の最初はどうなるものであつたらう。それが解れば、大抵は、人間の最初も解るはずではないか。これは全く便利な考へである。これは面白い。

「先生、先生、さうするとお腹の最初の赤ん坊を見ると、人間の一番に古い先

祖が解るのですか。」

「ええ／＼、さうです。大體は解らうといふものです。然らば、人間の先祖は、どんなものだつたと思ひます。」

今度は先生の方から質問して来た。それはどうして僕に解るはずのものでない。さつき、お腹に入つて居た最初は、針の先きでついたやうな小さなものであつたが、それが二つに分かれ四つに分かれと先生が話したが、頭も何もない團子のやうなものであつたらうか。

「お團子のやうなものですか。」

といつた所で、何だか僕にもわけが解らないのだ。

「さあ、お團子、といつても妙だが、ほら、理科でアミーバの事を教はつたのでせう。」

「教はりました。汚い水の中やなどに居ると教はりました。」

「まあ、アミーバのやうなものです。頭も手も足もないのでせう。細胞といふ真中に核といふ所があつて周りが卵の白味のやうなものから出来て居るものでせう。それが唯の一つあるのですが、二つに分れ、四つに分れ、八つに分れてさうして数が多くなつて行くのです。そのたくさんが一所に集つてこんな身體をこさへて居るのです。即ち細胞がたくさん集つて出来て居るのです。だから、人間も最初は唯一つの細胞であつたといふことになります。人間の先祖も、段々に調べて行くと次第に細胞の数の少い生き物となつて、つひに、アミーバのやうな、唯一つの細胞であつたといふことになります。」

アミーバが、では、人間の先祖といふわけか。先生は、又、必ずしもアミーバが先祖でない、アミーバによく似たものが先祖であつて、アミーバは、割合に其の姿をかへずに代々來たのだといふのだらうが、何にしても、有難い話ではない。どうせ違つたにした所がアミーバ位のものである。動物の中で一番に

下等なものは何かと問はれば、誰でもきつと、アミーバや、ゾトリ虫の類だと答へるのだらうが、人間の先祖もどうせは、その仲間であるといはなければならぬ。

「では、アミーバの仲間が人間の先祖ですね。僕らの御先祖は、泥水や溝の中に泳いでいらつしやつたのですね。」

「はゝゝゝ。とう／＼さう云ふ結論になりましたか。誠にどうも御氣の毒さま。」

「先生、僕は學問といふものは、本當になさけないことを、一生けんめいでやつて居るものだと思います。こんなことを調べて行くと、腹ばかり立つて来て、仕様がなかりありませんか。」

僕らだつて、自分が悪いことをして居ても、馬鹿とか泥棒とか云はれれば腹が立つたり、悲しくなつたりします。僕らの御先祖さまは、腐つた水の中で、



目暗滅法に泳ぎまはつていらつしやつたなんつて、悲しくなつてしまひます。」  
如何自分のお父さまが悪いことをしても、子供が、それを皆んなに知らせることが出来るものでない。修身の時間にも何かそんなことを聞いたおぼえがある。親の悪いことを手柄顔に役人に知らせて大へんに叱られたといふやうなことであつた。先祖のことを話せば随分、恥しいことではないか。學問だ／＼と、そんな恥しいことを、ほじくり出して得意になるなど、ちつとも感心しない。學問なんか、ちつとも、人情を知らないものだ。

しかし、待て／＼。アミーバの仲間が人間の先祖なら、それにもまだ、先祖がなければならぬはずである。

「アミーバの仲間にも、やはり先祖があるはずでせう。」

若し先生が、ないといつたら承知しない。親のない生き物はないはずだから。

「あるのでせうが解りません。」

「全く調べる方法はありませんか。」

「ないこともないので。細胞は、どうして出来たかを調べる事が出来れば解るのですが、調べて見ても、解りません。ふつと出来たといふより他に考へられません。」

解らないと來ては困つて終ふ。ふつと出来るといふならば、わいたのだらう。わくといふことはないのだと先生はよく話したが、種のないのに出来るならばわくのだらう。いや、種はあつても解らないのか。人間の力では、解らないのかも知れぬ。しかし、種があるとすれば、その又親になる種がなければならぬ、その又前の種と次第に尋ねて行きて最初の種は一體どうして出来たのだらう。

又、アミーバと同じ先祖から出て、別に進んだものもなければならぬ。

と考へて僕は、どうも草や木の類も生きて居る生き物だから、やはり先祖が

なければならぬが、その先祖も動物と同じことで、唯一つの細胞から出来て居るとすると、草木の先祖はバクテリアの類ではないかと思ふのである。バクテリアも始めは一つの細胞であるものが、ほんの短い時間に、非常にたくさんに数に分れると聞いたことがあるが、何だか、アミーバとよく似て居るやうに考へられる。確かにアミーバとバクテリアは同じ先祖から出たものに違ない。つまり、動物と植物は、同じ先祖から出て来たものであると考へねばならぬ。その同じ先祖は一體どんなものであらう。

その先祖その先祖と調べて行くと、果てのない話であるが、しかし、果てがないと云ふわけには行かない。元々地球は火の球であつたのだと、地理の時間に教はつたことがある。火の球であつたものなら、そんな頃に決して生き物が居るはずがない。石をとかすには随分高い熱がいるものだが、何千度といふ高い熱の地球に、とても、どんなに強い生き物でも住むことが出来ないに

さままつて居る。

さうすると、地球の上にも生き物の居ない時があつたのに違ない。

地球の表面が冷たくなつてから、何所かから飛んで来たのであらうか。日本にも瓊々杵尊は、高天ヶ原からお降りになつたと歴史で教はつたが、何所かの星からでも、生き物の種が天降つて来たのであらうか。

何所かの星から来たとなると、その星にはどうして生き物が居るのだらう。やはり、これにも先祖があるはずである。その先祖は、その先祖はと尋ねて行けば、ともかくも、最初の先祖がどうしてもあるはずである。最初の先祖は、一體何かからかはつて来たものであらう。

最初の先祖は、最初から有つたので、何かからかはつたのでもないといへば、進化論は破れて終はなければならぬはずだ。進化論が何所までもほんとうであるならば、最初の先祖も何かから進化したものでなければならぬ。

何だか、さつぱり解らなくなつて来たが、生き物にかはつて来るのには、その先祖が生き物では駄目だ。僕は、ともかくも、生き物の最初の先祖のことを考へて居るのだから。

だから、どうしても生き物に進化して来る先祖は生き物でないものでなければならぬ。生き物でないものといへば、生きて居ないものより他に無いわけだ。石や金やその他の生きて居ないものから生き物が出来たと考へなければならぬ。生き物の無い所に生き物が出来る。それはわくといふことでなければならぬ。さうすると物がわかぬと先生のいつたことは大きな間違つた考だ。進化論の考からいふとわかぬのではない、進化論の考からいつてこそ、生き物はわかねばならぬのだ思ふ。

死んだ物から生きたものになつたり、生きた物が死んだり、妙な工合なものだ。一體、生きて居るといふのは、死んで居るのと、どう違ふのか。死んだも

のが生き物にかはるのは、始めとどんな違が出来するのか。生き物が死んで行く時は、生きて居た時と、どうかはつて来るのか。どうせ僕らの先祖は石ころや土くれだつたといふことになれば、腹を立てて見たり悲しんで見ても、くだらない話である。僕にとつては、其の先祖のことよりも、生きて居るといふ事はどんな事かが、今の大问题である。

「さうだ。生きて居るといふことは、どんなことかが、僕にとつて大问题だ。」と僕は、義雄ちゃんと別れて、入口の格子戸を開けた。

「只今。」  
と玄關に飛び上つた。

一 僕は生きて居るか

「僕は生きて居るか。」

と人に問ふたとする。

「馬鹿な、そんなことを人に問ふ奴があるか。」

と、大抵の人は取り合はないにきまつて居る。

なる程、本気で、こんなことを人に問ふ奴は、馬鹿にきまつて居るかも知れない。

實は僕も、昔からりつぱに生きて居る都合で居たのだが、この頃段々に僕の先祖のことを調べて、つひ昨日、つまりは、土くれなどから生き物がわいたのだと云ふ結論を得たので、それでは、生きるといふことと、死ぬるといふこと

は、一體どう違ふであらうと考へなければならなくなつた、寢床に入つても、目が覺めても、第一番にそれが氣にかゝつて仕様がなない。

先づ、僕は生きて居る都合で居るし、又、人も間違なく生きて居るものとして、つき合つて呉れるのであるが、では、僕の生きて居る證據はと考へると、さうやす／＼とは答へられない。

「君はさうしてしやべつて居るのではないか。」

とやられると、なる程僕は、かうしてしやべつて居るから確かに生きて居るに違ないと思はれるが、しかし、ならば、しやべれない人は死んで居るのであらうかと考へなほして見ると、啞の人などはしやべれないにかゝはらず、あれは生きて居ると誰でも見るのだらう。

「自分の目玉の黒い内は……」なんつて昔から自分の生きて居る證據に、自玉の黒いのを引き合ひに出すものだが、これも随分あやしいものである。僕の

後隣のお祖父さんお祖母さん、二人とも目くらであつたとお祖母さまが話した事がある。目くらは僕の家へも按摩の人がよく来てお祖父さまの肩をもむが、實に上手にやると、よくお祖父さまも感心して話す。手や足のない人を淺草の観音さまで、よく見かけけるが、でも死んでは居ない。いつかお隣りの兄さんが僕の耳を引つばつたから、

「あ痛た。」

といつたら、

「おや痛い。では君も生きて居るんだね。」

と僕に、からかつたことがあるが、では、痛いことが解るのは生きて居る證據かも知れない。

が、後のおぢさんが、日露戦争の時に南山の戦に鐵砲の丸に當てられたが、その時は少しも痛くなかつたと話した。さうすると痛くない時だけ死んで居た

と云ふことになるのであらうか。

「のぼせて居たから痛くなかつたのさ。」とおぢさんは話して居たが、生きて居る時でものぼせたりなんかすると痛いのが解らないことは、考へて見ると僕にだつて、よくある。

解つた〜。僕はこんなりにつばに、身體が、ちやんとあるのではないか。しかし、僕のお母さまがなくなつた時にも、ちつとも、僕がお乳を頂いた時と違つたやうに見えなかつたので、さつぱりわけが解らなかつた。唯、何一口もいつてくれなかつただけはおぼえて居る。あれで死んだのだとはおかしい話である。けれども、さうだ。息をしないのだと、そつとお隣りのおばさんがお母さまの死んだ眞似をして見せたことがある。僕がまだ學校へ上らない時であつた。

道理で、水泳をやる時、水の中にもぐつて居ると息が出来なくて、ひどく苦

しくなつて来る。ぶつと水の外へ飛び上つて、

「あ、苦し、死ぬるやうだ。」

と誰でもよくいふ。顔も手足もどこも、ちつとも生きて居る時と違はないでも、息が出来ない人は、つまり、死んだといふことになるのだらう。理科では呼吸作用といふものは息をすることだ。息をすることから生きて居るのだと教はつたが、つまり、このことだ。僕は、肺の中へ空気が入つて来て、空気中の酸素が血にまじつて身體をめぐり、身體の中のいらぬものが血と一所に肺に返つて来て酸素にもやされ、炭酸瓦斯になつて外へ出るのが呼吸作用だと教はつた時には、全で器械のやうに身體は出来て居るものだなと思つただけであつたが、これが生きて居る證據の第一であるとなれば、もう一度考へなほして見なければならぬ。

それでは、息が止まると、どうなるのであらう。息が止まるといふのは、空気が肺の中に入らなくなることであらうから、空気が肺の中になくなればどうなるのであらう。空気がなくなれば酸素が無くなるわけだから、僕らの身體の血に酸素が入らない。又、いらぬものを炭酸瓦斯にして外へ出すことが出来ない。つまり、血が全く、汚くなつて終ふといふことになるのだらう。

これは面白いことになつた。では、呼吸作用は、唯血をきれいにするためにあるのだといふことになるわけだ。息が止まつても、血に酸素を入れて、汚い血を、きれいにすることが出来れば、死なぬものだと考へられるではないか。とすると、血といふものが、生きて居る證據としては、非常に大事なものになつて来る。

僕らでも血が出ると、ほんとうに恐はいが、そんな大事な生命のある第一の證據になるものだからであらう。随分赤くきれいに見えなければならぬものでありながら、小さい子供でも恐はがるのも、もつともかも知れぬ。

血は心臓を宿にして、血管を通つて身體中をめぐつて居ると教はつた。血を送り出す管が動脈で、身體の隅まで行つてから、返つて来る管が静脈であるとおぼえて居る。一體、血が身體をめぐるのは何するためであつたか。今そんな試験をされては、すぐには答へられない。何しろ教はる時に、外のことはかり考へて居るものだから、しつかり頭に入らなかつたのだ。

ともかくも、からだの隅から隅まで配つてある所を見ると、よほど大切なものに違ない。皮のぐつと厚い所でない限りは、血の出ない所といふものはないやうだ。これは一つお隣りの兄さんに聞いて見よう。

今日は日曜だから、家に居るのだらうか。

「おばさん御免なさい。」

「どなた。」

「僕ですよ。」

「おや誰かと思ひました。」

と玄關にしやがんだ。

「兄さん家に居ますか。」

「居ますよ。どうぞお上り。」

僕はとん／＼と梯子を上つて行つた。

「兄さん。」

「おゝい。梶山君か。入り給へ。」

入つて見ると義雄ちゃんが、一生けんめいで算術を教はつて居る所である。

「義雄ちゃんもお家。兄さん、血は何のためにあるの。」

「血。からだの血か。」

「さうです。」

「又、試験か。さうだね。血液の必要なわけか。第一番に、胃や腸などで出来

た養ひ分を身體中に配るのだね。第二に、身體をもやして、これは血液の中の酸素がもやすんだよ、へらして行くのだね。第三に、もえたかすを外へ流し出すのだね。まあ、ざつと、そんなものだらう。満點か。」

「有難う。満點く。」

うろたへて下りて行かうとしたら、

「君、あまり先生をいぢめるなよ。」

「大丈夫ですよ。僕の先生は、僕の問ひ位には、びくともしませんよ。」

「さうか。それを聞いて安心した。」

「さよなら。」と歸つた。

兄さんは、高等學校の試験をうけるとて一生けんめい勉強して居るから、中、上手に答へてくれる。

胃や腸などで出來た養ひ分が血にまじつて身體中をめぐつて、身體中の細胞

を養ふのだと教はつたことは思ひ出される。細胞でも、物を食べないで生きて行くことは出來まいから、血管が、それを配つてくれればほんとうに調法なわけである。しかし、血の中の酸素が、血の行つた所をもやすといふのはおかしい話である。もやせば、兄さんのいふやうに、そこがへつて終ふにきまつて居る。身體をへらしてどうするのだらう。これは先生に聞かなければなるまい。月曜日の朝は、何だか學校へ行くのがうれしくてたまらぬ。休みといふものはさつぱり面白くなって困る。

今日も僕が先登第一で、小使さんが、

「梶山さんは、ほんとうに毎朝お早いですね。」

といひながら門の戸をあけてくれた。

お道具を机の中にしてまつておいて、職員室の方を見はつて居たら、誰か先生の姿が見えたから、きつと僕の先生に違ないと行つて見たら、五年生の先生で



あつた。

「随分早いね。」とにこ／＼して居る。

「先生もお早いですね。」とお辭儀したら、

「いや、昨夜は宿直だつたから。」と笑つて居た。

職員室の火鉢にはどれにも火が入れたてで、冷たさうだ。僕の先生の机には硯箱が二つ重ねて乗せてある。まだ來ないかなあと、小使室の方へ行つて居たらことん／＼とやつて來た。

「先生、お早う御座います。」

「おや、お早う。ほんとうにお早いね。」

と外套をぬいだ。

「先生、血の中の酸素が、血と一所にめぐつて、身體中をもやして行くのです。どうしてそんなにもやして終ふのですか。」

「どうも、顔を出す早々、お面と來るから驚いて終ふ。如何名人でも、不意打は仕様がな。まア本包でもしまつて、ゆつくりと御返答申上げませう。さあ、どうぞこちらへ。」

と僕を職員室へ引つぱり込んだ。

「相かはらず、いぢめられますね。梶山さん。あなたの先生はね、あんたの姿を見ると、胸がどき／＼して來るつていつて居ますよ。」

と五年の先生は何か書いて居た手をやめて、僕の方を見た。

「で、先づ、手を温めなさい。その酸素が身體をもやして行くことはね、もやされる身體のことから、考へて行かなければなりません。身體はたくさん細胞から成り立つて居ることは御承知でせう。」

「おぼえて居ます。さう教はつたのです。」

「その細胞は主に何から出來て居るのですか。」

はてな、細胞は卵の白味のやうなもので真中に核といふ、少し違つた所があることはおぼえて居るが、それが何から出来て居たのか、ちよつと思ひ出せない。卵の白味は蛋白質とかいふものであつたことは頭に残つて居る。卵の白味と同じやうなものといふならば、或は蛋白質とかいふものかも知れぬ。

「何だか解りませんが、卵の白味と同じやうなものから出来て居ると教はつたから、蛋白質とかいふものではありませんか。」

「中々よく考へられましたね。如何にもその蛋白質です。蛋白質は、何から出来て居たのですか。」

是れでは、先生に問ふて居るのか、問はれて居るのかわけが解らない。蛋白質は何から出来て居るのか、さつぱりおぼえて居ない。教はつたのならおぼえて居ないといつても善いが、教はつたのか、教はらなかつたのかそれもおぼえて居ない。教はらなかつたのなら知らないといふのがほんとうだらう。

「知りません。」

「はあ、教へませんでしたかね。」

と先生が天井の方を見た。

「いや、教はつたのか教はらなかつたのかそれもおぼえて居ないので。」

「はゝゝゝ、それでは仕様がな。まあ教はつたのだらうが教はらなかつたのだらうがそれはどうでも善い。蛋白質はね、炭素とかね、水素、それに酸素窒素硫黄などが一所になつて出来た随分面倒くさいものです。」

さういはれば思ひ當ることがあるやうにもある。やはり教はつたことがあるかも知れぬ。

「所がこの蛋白質が、炭素二百幾つ、水素三百幾つと云ふ工合で六七百から二三千の原子、炭素などは原子といふのですね、があつまつて出来て居ることを考へると、そんなに数が多いだけに、随分こはれやすいのです。このこはれや

すいといふことが全くくせ者なんですね。」

すると人間の細胞は、そんなにこはれやすいやうに造られて居るのか、ちよつとのことでこはれないやうにしつかりこしらへておけば善いのに、わざ／＼こはれやすく造るのは、先生のいふやうに確かにくせ者に相違ない。

「どうして、そんなにこはれやすく造つたんですか。」

「物がこはれる時には、そのこはれる物から出る力が、周りのものに傳はつて、周りのものを動かすのでせう。例へば、卵でも、ダイナマイヤなどでも、自分のはじれる力で、随分ひどい力を周りのものに傳へるのでせう。たくさんの原子から出来て居る蛋白質がこはれば、その力が色々な仕事をすることになるのでせう。人間のすべての身體によつて行はれる仕事は、つまりこの蛋白質のくづれる所から出て来る力によるものなのです。蛋白質は人間の身體を造つて居ながら、わざ／＼それをくづして力として、それによつて自分の身體の色々

な仕事をやつて行くのです。」

それは大へんだ。自分の身體をこはして、自分の仕事をするとは。しかしどんな仕事でも、自分の骨折りをしなければ出来ないものだからあたり前のことかも知れぬ。が、考へて見るとそんな風にして行つたら、身體はこはれる一方で終に全くこはれてしまふのではあるまいか。

「こはして仕事をして居れば、身體はすぐに全くこはれて終ふのではありませんか。」

「さうです。こはさなければ仕事は出来ない、しかしこはせば、全く死んで終ふ。其所の所を、うまくして行くのは、どうすれば善いのでせう。こはしただけ元へ返して置けば善いわけでせう。」

僕も、仕事をするために自分のからだをこはして、それで終に死んで終ふではなさけない話だと思つて居たのだが、それを、こはれただけ元へ返せば善

いのでせうとは、さすがに先生はうまい。算術の四則の問題を解くやうだ。全く感心して終つたから、

「ほんとうにその通りです。」と大きな聲をしたので、はつと氣がついて顔が赤くなつてしまつた。しかし、それを元に返すといつた所で、返すものは、やはり自分でなければならぬ。返す力は、どうして出て来るのか。

「しかし先生、元に返すには力がいるのでせう。それはどうして出来ますか。」  
「蛋白質をこはして力が出来たでせう。その力で返せば善いではありませんか。」

如何にもさうだ。出来たその力で、又元へ返せば返るわけである。けれども、こはす／＼と先生はいふが、こはれて／＼行くものならば蛋白質といふものになることは出来ないはずである。一旦は蛋白質になつて、さて、それをこはすとならなければならぬ。ならば出来上つて居る蛋白質をこはして行くものは

何であらう。自分がこはすといつても、自分がどうしてこはすのか。

「蛋白質をこはすのはどうしてこはすのですか。」

「こはれやすく出来て居る蛋白質でも、何かで打たなければ、ひとりではこはれるものではありません。それを打つものが酸素です。」

では酸素が蛋白質をこはすといふのか。酸素といへば、呼吸によつて空気の中からとられて、血に入つて身體をめぐらすであつたが、ははあ、解つた。血がめぐるのはその蛋白質をこはすために酸素を運んで歩くのか。

「血が酸素を持つてまはるのですね。」

「さうです。だから血は大切なわけでせう。血が酸素をもつて歩かなければ、蛋白質をこはすことがうまく出来ない。従つて身體に力が出ない。仕事が出来ないとなつて來ます。」

お隣りの兄さんは、血の中の酸素で、身體をもやしてへらすのだといつたが、

つまりこれであらう。さうだ。酸素は物をもやす性質があるのだから、蛋白質に打當つて、すぐに蛋白質をもやすのだらう。たくさんもえると、たくさん力が出来ることになる。大きな力を出さうと思へば、たくさんに蛋白質をもやさなければならぬことになる。たくさんに蛋白質をもやさうとすれば、血がたくさんにいるわけだ。だから、力仕事をする場所には血がよつて来るのだが、あつて、蛋白質をもやさうといふのだらう。もえるといへば思ひ當る。血のよつて来る所が温くなるのはもえるからであらうか。道理で一生活けんめいで運動した後は、身體中が温い。あの時は皆身體中がこはれて行くのだらう。こはれるのであんな運動をする力が出るのであると考へられる。

こはれることは解つた。しかし、先生は、こはれただけ元へ返せば善いと云つたが、どうして元へ返すのか。酸素でもえて、へつただけ元へ返すのにはどんな方法があるのだらう。

「へつただけ元へ返すのにはどうしますか。」

「えつ、ちやんと先きを考へて居たのですか。解りませんか。お腹が減つたらどうして元へ返しますか。」

「お腹が減れば御飯を食べれば元のやうになる。」

「御飯を食べます。」

「食べた御飯はどうなりますか。」

「胃や腸などでこなれて養分になります。」

「養分になつてどうなります。」

「からだの養分になるのではありませんか。」

「養分になつてどうなるかなどと、わけの解らぬことを問ふたから、かう不平さうに答へたら、

「いや、胃や腸などでこなれてから、からだの養分になるのは、どうしてなる

のですかと問ふのです。」

どうなるかといふのは一體どうした意味か。胃や腸で出来た養分は血によつて身體中に配られるのではないか。なる程、その血にまじつて配られることを問ふて居るのだらう。

「血にまじつて身體中に配られます。」

「つまりそれです。だから血が、胃や腸などからもつて来て返して歩くことになりませう。」

之れは、うまく出来たものだ。血は酸素を肺から受取つて身體中をこはして歩いて、一所に、胃や腸などから養分を受取つて、なほしをして歩くわけだ。何のことはない片手で拳固をはつて置いて、片手でなでて歩くやうなものだ。

先生の顔が二三人見えて来たから、

「先生御免なさい。」と僕は出て行つた。

さうすると、酸素と養分とは、どうしても、なければ、身體が動いて行かぬことになる。その酸素は、空氣の中にあるから、それを息きをして肺に入れ、血にませる。養分は、養分といへば、僕らの食べるものだから、野菜やお魚、肉、お米などが、皆、外にある。これをとるには、さうだ、ともかくも御飯を頂くのだ。胃や腸などで養分になるわけだ。それを血が受取つて歩くことになる。つまり、さうすると、血は商賣人だといふことになるかなあ。肺や胃などで造つた品物を運んで歩いて居る。いや、商賣人ならば、利をとらなければならぬ。それよりも、運送屋といった方がいいかも知れぬ。

運送屋は行きも返りも、中々手もち無沙汰では歩かぬもので、必ず荷物を積んで居るが、血は返りに何を運んで来るのだらう。

さうだ。理科で血管の静脈といふのは、いらぬものを運んで歸るのだと教はつたが、それだ。いらぬものと聞いた時には、いらぬものといふの

は何のことか解らなかつたが、今考へれば、蛋白質が酸素によつてこはされたものに違ない。

蛋白質がこはれる時に力が出るものならば、こはれてしまつたものは、何の役にも立たぬことになる。じやまにこそなれ何にもなるものでない。それが、いらぬものといふものだらう。とすれば、血はその蛋白質のこはれを受取つて返つて來るといふことになる。それを一體、何所へすてるのだらう。肺に返つて炭酸瓦斯を出すとおぼえて居るが、蛋白質はこはれて炭酸瓦斯になるのか。もう外へすてられる物はないか。大便がある。しかし、大便は、胃や腸の方からすぐに出るはずであつたから、血が、もつて返つたものではないと思はれる。だから蛋白質がこはれたのとは別だ。小便がある。これは腎臓で出來るとおぼえて居る。腎臓へはたくさん血管がいらぬものを送つて來るはずであつたから、小便は、つまり、蛋白質のこはれたものになるわけである。小便はアン

モニアと水とが主な性分だとおぼえて居るから、蛋白質がこはれるとアンモニアと水ともなることになる。もう、身體の外へ出るものはあるまいか。ある。汗がある。しかし、これは小便と同じものだと教つて居るから、やはり、アンモニアと水が大部分だらう。

もう身體の外へ血管からすてられるものは無ささうだ。では、蛋白質はこはれて、炭酸瓦斯や、アンモニアや水などになるといふことになる。

さうすると、血は、身體をこはして歩いて、なほしをして歩いて、こはれたものを集めて歩くといふことになる。

それで先づ血のはたらきは、大體解つたとしておかう。血がはたらいて居れば、僕らの身體は、又、はたらいて居るわけである。そして、この身體の一切のはたらきをするものは酸素によつて蛋白質がくづれる時に出る力であるから第一にどうしても蛋白質といふものがなければならぬ。これは力の源になるの

だから。

蛋白質をこさへるためには、食べ物を食べてこれをこささなければならぬ。だから、食べ物を食べずに居れば終には死んで終ふものであるが、これは、蛋白質がなくなつて終ふからであらう。物を食べることは生きて居る證據だ。次に蛋白質があつても酸素がなければこはれないから力が出来ない。だから、酸素をとる呼吸はなければならぬ。息をして居るといふことは生きて居る證據でなければならぬ。

無論、息をして炭酸瓦斯を出したり、小便などを出すのも生きて居る證據でなければならぬ。

けれども、随分久しく食べないで生きて居ることも出来ると聞いて居る。又五六分も水の中にもぐつて居る人もあると云ふことである。だから、唯、食べる、食べないや、息をして居る、して居ない、小便が出る出ないなどは、生き

て居る證據には、なりかねる場合もあると思はなければならぬ。

然らばほんとうに生きて居る證據といふものは無いものであらうか。

何だか、そんな事を考へると、さつぱり解らなくなつて終ふ。

待て／＼。息をしても、血が通つて居なければ役に立たないと、前に考へたことがあるが、それに違ない。又物を食べても、血が配つてくれなければ何にもならぬわけである。

さうすると、ともかくも、血の通つて居る時は酸素も送られて居ることになる。又、蛋白質もまだあるといふことになるはずである。即ち、酸素が送られて居るからこそ蛋白質がこはれて力が出る。その力によつてこそ血も通ふのであるから。血が通つて居るのは、まだ、身體のはたらいで居る證據になると考へねばならぬ。

つまり／＼、血が通つて居ることが生きて居るほんとうの證據になる。



いや、どうも、随分苦しかった。先生に聞くと、ちよつとですぐ解ることでも、ひとりで考へると、全く苦しい。何が何やら、まるで糸がもつれたやうで、どう考へて善いか、さつぱり見當がつかなくなつて終ふ。

僕は物を考へてこんなに、根氣強くやつたこともないが、しかし、一人で、かうりつぱに答を出したこともない。

生きて居る證據は血が通つて居ることだ。さう考へれば、お醫者といふものは、よく人の手の脈を見るものだが、血の通ひ工合によつて人の生命の様子を見る積りで、あゝやるのかも知れぬ。なる程、うまい考である。お母さまがなくなつた時にも、お醫者さまが、ちやんと手を握つて居て離さなかつたやうにおぼえて居る。

「俺の手には血が通つて居るんだよ。」

とお魚屋の兄いは、よく腕をまくつて見せるが、ほんとうにうまい考である。

「僕は生きて居るか。」

「君の手をナイフでぐつと切つて見給へ。血がさつと飛出たら、君は確かに生きて居るのだ。」

と答へれば、満點だ。百點だ。

## 二 僕が生きて居るならアミーバは死んで居るわけだ

「僕は生きて居るか。」

なんつて、生きて居るのは解り切つて居ることでも、その證據を出して説明して見るといはれると、全く困つて終ふ。ちやんと生きて居るのは解つて居るならば、そんな馬鹿なことを問ふたり答へたりしなくて善いわけであるが、し

かし、僕は、そんなことが好きでたまらぬ。

「この子は何でも理屈がつかぬと承知しないので持てあまして終ふ。」

とお祖母さまが、いつか、御飯を頂くときにいつたことがある。そしたら、お祖父さまが、

「馬鹿なことをいふな。坊やは、きつと偉い學者になるよ。今に見て居ろ、日本の大學者の中に數へられるやうになる。坊や、勉強するんだよ。」

と大へん僕のひいきをしてくれたので、うれしかつた。人が解り切つたことだといつても、僕はどうしても、その理屈を聞かないと承知が出来ないから、お祖母さまのやうな昔の人は、困つて終ふだらう。が、いつか先生は、ニユートンといふ大學者は、林檎が風のないのに、庭へ落ちたのを見て、なせ風のないのに落ちるのだらうと考へ出して、終に、萬有引力といふことを發見したと話したことがある。林檎の落ちるのは、柄の所を蟲が食べて居たり、腐つて居

たりすれば、きまつてあることで、ちつとも驚くほどのことでないと大抵の人が考へるにきまつて居るのを、その理屈を知らうとしたのが、あんな大發見の元であつたとすれば、理屈を知らうとするのは、善いことではないか。お祖母さまは、自分が、理屈が解らないものだから、いつでも僕が物を問ふと、うるさいねと降参して終ふ。やはりお祖父さまには偉い所がある。

今日は随分お天氣がよくて、椽の日向ぼつこは氣持が善い。僕の腕はこんなによせて居るが、これはお父さまもお母さまもあまり太らない性質だからとお祖母さまは話して居た。でも、ちやんと血が通つて居る。これが僕の生きて居る證據になるのだ。そのわけはと、人が問ふて來たらば、昨日までかゝつて考へ抜いた理由を、すじをたてて話して聞かせれば、皆感心するにきまつて居る。

北海道で熊に出會つて、かなはないと見た時には、死んだ真似をすると、熊は鼻の所に手をあてて見て、息がしないと、死んだものとして逃げて終ふとか

いふ話であるが、熊は未だ血の通つて居ることが、ほんとうの生きて居る證據だといふことを知らないからであらう。熊でも進化して人間位利口になると、人間が死んだ真似しても決してだまされないうやうにならう。お醫者がする様に手の脈を見たり、胸に耳を當てて見たりして、これではまだ生きて居るなと見たら、がぶりと喰ひ付く、おゝ恐はい、恐はい。だから、あまり熊などは進化しない方が善いのだ。

所で、その熊にも血が通つて居るはずだ。熊などが、幾ら死んだ真似をしても、僕らのやうに生きて居る證據をちゃんと知つて居る者は、決してだまされはしない。ちよつと身體に手を當てて見て、温か味があれば、まだ、生きて居る、この温か味は血が酸素を配つて蛋白質がこはれるために出来る熱だから、熱のある内は、力があるはずだ。生きて居ると見ていいわけだ。だから逃げて居て喰ひつかれないやうにするのが安全第一だと、すぐに飛んで逃げる。

又、大蛇に出會ふ。蛇の野郎は、目を閉ぢることが出来ないから、死んだ真似して居るとちよつと目だけ見ても解らぬ。そこで、例の方法で、身體に手を當てて見る。温か味があれば、りつぱに生きて居るわけだから………待て、之れは、少しへんになつて來た。

理科で教はつた時には、蛇の類は、蛙の類などのやうに血が人間や獸や鳥などと違つて温かくないとおぼえて居る。僕はあんなものは、見てさへぞつとするから、さはつて見たことはないが、學者がさういふのだから間違はないのだらう。さうするときははつて見ても解らないわけだ。しかしともかくも、血があるのだから、生きて居る證據になる。魚も冷たいが、やはり、お料理をする時に血の出るのをよく見る。

それでは、一つ進化論に従つて、人間の先祖アミーバを調べてやらう。

アミーバは、一つの細胞から出來て居て、すきとほつて居る身體の真中に核

がある。教はつたが、それでも生きて居るのであると、先生はいつて居た。その證據には、食べ物が、其所にあると、自分の身體を何所でも手のやうにして延ばして食べ物を包んで、身體の中に入れて終ふ。食べられないものは、外へ出して終ふ。

物を食べたり、動いたりする所を見れば確かに生きて居るのであらうが、今の所、僕にとつては、それ位なことでは、承知が出来ない。第一に血があるかないかの問題があるはずである。けれども、其所までは教はらなかつた。困つたな。こんなことは、とても僕らの教科書などには書いてない。

お隣の兄さんは未だ歸つて来ないだらうか。

ああ、障子が開いて居るやうだ。二階の障子が開いて居る。歸つて来て居るかも知れない。

「お隣の兄さん。」

はてな、

「お隣の兄さん。」

「おおい、梶山君か。」

と顔を出した。僕も椽の柱につかまつて身體を外へ出して、

「あのね、アミイバね。」

「あゝ、アミイバがどうした。」

「アミイバには血があるのですかね。」

「アミイバに。アミイバに血なんかあるものか。細胞が一つで出来て居るぢやないか。血だつて、たくさん細胞が集つて出来て居るだらう。」

「おやさうでしたか。血もたくさん細胞から出来て居るのですね。さうく思ひ出しました。赤血球も白血球も細胞のはずでした。あの白血球はアミイバのやうなものはずでしたね。解りました。有難う。」

と僕は引込だ。

「おおい。それで善いのかえ、問ふことはもうないか。」

「え、もうありません。今は。有難う。」

はてな、アミイバには血がない。さうだ、無いわけだ。一つの細胞から出来て居るのだもの。

血のないアミイバが生きて居るとは、おかしいぞ。

ともかくも僕の考によれば、血がある、血が通つて居るといふことが、生きて居る證據の確かな一つであつたはずだ。所がアミイバには血がない。とすれば、僕が生きて居るものならば、血のないアミイバは、死んで居なければならぬはずである。これは、どうしても、おかしい話である。實際にアミイバは、物も食べれば、大便もするのだから、まさか死んで居るともいへないとすれば生きて居るわけだ。困つたことになつた。これは、もう一度考へなほして見なければ

ばなるまいか。いよく解らなくなつて終ふ。

何にしても、つまりは、生き物は、蛋白質がこはれる時の力で、はたらくのであるから、第一に、その身體が、蛋白質で出来て居なければならぬ。アミイバは一つの細胞だから、細胞は蛋白質から出来て居ると教はつたから、大丈夫蛋白質である。人間は細胞のたくさんに集まつて出来たものだから、無論蛋白質である。

其所は兩方とも同じことである。さうすると次には、之れをこはすものは酸素でなければならぬ。僕らは酸素は、息をして空氣の中からとるのだが、アミイバはどうしてとるのだらう。はてな、アミイバにも僕らのやうに息をする肺があつたらうか。待て、アミイバは、大體、水の中に棲んで居るのではないか。さうすると、肺では息が出来ない。水の中に居るものは、肺でなくて鰓で息をするはずであつた。魚もその通り、蛙でも、オタマジャクシの時には、鰓

があると教はつて居る。

ならば、アミーバにも鰓があるのだらうか。

あんなすきとほつた身體だから、鰓があれば、外から解りさうなものだが、核の外に何も無いはずだから、鰓なんぞないにきまつて居る。鰓がなければ何で息をするのだらう。肺も鰓も、たくさんの細胞から出来て居るはずだから、一つの細胞で出来て居るアミーバに、そんなものがあるはずがない。とすると、一體、どこで息をするのだらう。息をする所がないならば酸素をとらないといふことになる。酸素をとらなければ、はたらきが出来ない。だから、アミーバが生きて居るものならば、どこからか息をしなければならぬ。困るな。

さうだ。又、兄さんに聞いて見てやらう。

「お隣りの兄さん。兄さん。」

と前と同じやうに椽の柱につかまつて、身體を外へ、枝しやくとりが、桑に

つかまつて居るやうにして大聲を上げたら、

「おおい。何だ。又、質問か。うるさいね。」

と、窓から顔を出した。右手にペンを握つて居る。

「え、あのね。」

「君は、もう問ふことはないといつたぢやなかつたの。」

「あの時はなかつたのです。又出来たのです。」

「まあ、いいさ。何だ。」

「あのね。アミーバは何所で息をして居るのですか。」

「何所で。さうだなあ。身體中でして居るさ。」

「身體中で息をする奴があるもんですか。」

「有るさ。君もして居るぢやないか。」

「僕が。僕はちやんと肺でして居ます。」

「肺だけぢやないさ。身體の皮膚全體でやつて居るんだ。先生、そんなこと教へなかつたの。」

待て／＼、これは考へなければならぬ。先生が教へなかつたことを、お隣の兄さんが知つて居ては、きつと兄さん、先生は物を知らないと思ふに違ひない。身體の皮で息をして居るとは妙だ。いや、教はつたことがある。確かにある。皮膚からも息をするのだから、身體に垢をつけてをくと、息をする孔がとまつて身體の害になるといふことであつた。うつかりして居た。教はらなかつたとしてもいはうものなら、先生の名譽にかゝる所であつた。

「思ひ出しました。確かに教はりました。有難う。」

と引込んだ。ああ、手が、すくんでしまつた。しやくとり蟲の眞似をして居たものだから。

「恐ろしく氣の早い奴だな。もうそれでないか。聞くことは一度に皆聞いてお

けよ。」

「今はありません。又お願いします。」

では、アミーバは身體の外がはで息をするといふことになると思ねばならぬ。ともかくも、身體のはたらきは、酸素が、どうしても、なければならぬはずだから。

さうすると、血はなくても、生きて居ることになる。僕は、どうして、血がなければ生きて居ないのだといふ結論を出したのだらう。

つまり、血が酸素を配つて、又、養分を配つて歩き、ゝたり物を集めて返る役をするのだから、血が通つて居さへすれば、まだ、身體のはたらきがあるといふ所から、血が生きて居る證據だと結論を出したのであつた。血がなくても、酸素がうまく配られ、また養分もとられて行けば、身體は、はたらくわけである。はたらいて居れば生きて居るわけである。アミーバのやうに、唯一つの細

胞では、とても血も出来ようがない。又肺や胃などもあるはずがないのだから、一つの細胞で、何の役もするといふことになる。さうすれば、面倒くさくなくて善い都合である。自分で働いて、自分で食べて行けば、りつぱに生命があるといふことになるから、アミーバも、りつぱに生きて居ることになる。僕も生きて居る。しかし、アミーバもりつぱに生きて居る。

### 三 アミーバと草木とどちらが上等か

毎日く、頭を痛めて考へたあげくに出来た答えは、アミーバも僕らと同じく、りつぱに生きて居るといふことであつた。何だ馬鹿くしい、そんなことなら、始からちやんと解つて居るぢやないか。しかし解り切つたことでも、考へて、確かに理屈の上から、さうなると解らないと、どうしても承知が出来な

い。いつかお隣りのおぢさんに、承知の出来ない話をしたら、随分やつかいな病があつたものだといつたことがある。ほんとうに病のやうなものかも知れぬ。だから、お祖母さまが嫌がるはずだ。けれどもお祖父さまは、反對に、ほめて居たから、病にも、善い病と悪い病があるとすれば、僕のは善い病なのかも知れぬ。

「病にも善いのと悪いのがあるのでせう。」

と、お隣のおぢさんがお湯に行く所をつかまへて尋ねたら、

「病に善いのがあつてたまるものか、肩の、ちよつとこつた位でも、指先きの傷位でも、中々苦しいものだ。……あるよ、戀の病なんつてえものは、少しは善いんだとよ。」

と笑つて行つた。少しでも善い病ならわづらつて見ても善いが、僕のこの病は、では、善い内に入らないとすると駄目だ。しかし、これも、持つて生れた



性分ならずと、よく人がいふが、性分なら仕方もないとあきらめねばなるまい。

ともかくも、アミーバも、生きて居るといふ點から見れば、僕らと同じことだ。それならば、あれも、りつぱに大手をふつて歩いても善いわけだ。もつとも、あれには、ふらうと思つても一つの細胞から出来て居たのでは、大手などあらうやうがないから仕様もないが。威張るのには、やはり手などが必要なのかも知れぬ。片輪の人といふものは、人に馬鹿にされて、見て居ても氣の毒なものだが、つまり、あたりまへの人よりも、手や足などのやうなものが足りないからであらう。何でも、人よりも、物をたくさん持つて居れば威張れるといふものだらう。道理で、お金でもたくさん持つて居る人が、世間で威張つて居る。物持ちは上等だと云ふことになるのであらう。其所で、人間が一番に上等で、アミーバが、最も下等だとなつて来るのかも知れぬ。人間は細胞が非常にたくさんに集まつて出来て居るから、唯一つの細胞で出来て居るアミーバよりも上等だとなつて来るのだらう。

物持ちは上等だとなると、それでは、草や木などは、アミーバよりも、ずつと上等でなければならぬ。草や木は、随分たくさん細胞で出来て居るはずであつたから。

しかし、草や木はどのやうに多くの細胞が集つて出来て居ても、あゝして、土にしがみ着いて離れぬ所を見ると、一つの細胞から出来て居ても、アミーバは、ちよつと僕らのやるやうに、思ふやうに身體を動かして居るから、アミーバの方が上等だとひいきしてやりたくなる。

大體、草や木だつて生きて居るに相違ない。根などから食べ物をとつて、あゝして、大きくなつて行くのだから。

が、生きて居る證據は、ちよつと上面を見ただけでは信用がならない。第一に息をしなければならなかつたはずだ。草や木は何所で息をするか。理科では、

葉の裏の氣孔と莖にも氣孔があると教つたが、其所で息をする。食べ物は先づ根からとる。葉からも炭酸瓦斯をとるはずであつた。之れは理科の筆記帳を出して見るに限る。

なる程、解つた。葉の表で同化作用が行はれて、炭酸瓦斯の炭素と、根から来た水とで、澱粉が出来て、その澱粉と、根から来た色々な物とで蛋白質やなどが出来る。随分面倒臭いな。それから、澱粉の大部分と、蛋白質などの少しとが、葉の裏で、空氣中の酸素と一所になつて、炭酸瓦斯となつて出ていく。さうすると、息をするのは、同化作用で出来た澱粉の大部分と、酸素とが一所になつて炭酸瓦斯になるのだな。それで、草や木の色々なはたらきをする力が出来るわけか。それならば、蛋白質などは、あまり、こはされずに終ふことになる。待て、人間でもアミイバでも、大抵は蛋白質と酸素とが一所になつて、力が出来るはずであつたが、其所は違ふやうだ。が、どうせ澱粉も蛋

白質になるものだから、まあ善いとしておかう。

かう考へて見ると、生きる方法は、あまりどれもこれも、かはらないものとなつて来る。では、アミイバと草や木とは、つまり、どちらが上等かといふことは、やはり、細胞の數でさめるより仕様がないのであらうか。

どちらにしても善い。人間が一等上等で、萬物の靈長だといつて居るのだから、草が上にならうが、アミイバが上にならうが、どうでも善いやうなものがある。

一つの細胞の生き物といへば、バクテリアの類もあるのだが、これも、人間のからだや、その外のものの身體の、蛋白質などをとつて生きて居るのではあるが、それでも、ちやんと、自分の力で養分をとつて、自分の身體を保つて、幾らでも、數をたくさんにして行くのだから、りつぱに生きて居るといはねばならぬ。

赤痢やコレラのバクテリアなどは、人の身體に居候をして居て、人をひどい目にあはせるといふけれども、人間だつて、外の草や木や、獸や魚などのお蔭で生きて來て居るのだから、居候だといへばいへるわけだ。どうせお互さまだから、そんなことで、生きものの上等下等はきめられぬと思ふ。

いつか、先生は、細胞の大部分をこしらへて居る蛋白質は、動物の力では出來ません。葉緑素のある植物ばかりがこしらへることが出來ますといつたことがある。なる程、人間でも何でも動物は蛋白質のこはれる時の力で、一切のはたらきをするはずであるから、蛋白質が溜まるはずもなく、又、石や土などを食べないから、蛋白質をこしらへることも出來ないのであらう。いや、蛋白質ばかりでなく、澱粉や油や砂糖などの、僕等の身體になくてはならぬものは、皆、草や木の類が造るのであると教はつた。さうすると、萬物の長である人間を初めとして動物の類は、皆、草や木のお蔭で、生命がつながれるといふこと

になる。全く、草や木の居候、厄介者に違ない。然らば、人間は草や木よりも下等なものであらうか。

上等下等は、何だか、ちよつとで解りさうにもない。ともかくも人間が一等上等だとしておけば善いだらう。どうせ、自分らに都合の善いやうに考へて行くのがあたりまへだから。

#### 四 生き物の生命とは何か (1)

僕も生きて居る。アミイバも生きて居る、草や木も生きて居る。バクテリアもりつぱに生きて居る。困つて終ふな。こんな片つぱしからりつぱに生きて居ては、全く、萬物の長である僕らにねうちがなくなつて來る。アミイバの野郎と溝の邊りで出會つたとする。

「おい君。」

見るとアミーバが、僕を呼びかけて居る。

「失敬なことをいふな。アミーバの癖に。」

すると、アミーバは、嫌に落着いて、

「これはどうも、學問をした君にも似合はないお言葉。我輩だとして動物の一種君だとして動物の一種、生きて居る所はかほりのないはず。我輩は生き物といふ同等のものとして、今日は、呼びかけたのです。お氣にさはつたら御容赦。」

と來たらどうする。なる程、考へて見ると、向ふは、生き物といふ立場から僕に呼びかけたとすれば、君でたくさんである。これをとがめるのは、とがめる方の無學である。其所でこちらにも、大に胸を大きくして、萬物の長たる寛大ぶりを示しながら、

「いや、どうもこれは失敬。君のお言葉通りだ。時に、君は生き物として同等

だといふが、生き物とは、どんなものか知つて居るか。」

と持ち出して、その説明が、あやふやしたものであつたら、そんなあいまいな頭で、同等だなんつて片腹痛いときめつけてやる考で居たら、

「いや、知つて居るといふわけでもないが。」

と來たから、それ見たことかと、

「そんな、第一に知つて居なければならぬことを知らない癖に、僕らと同等とは、けしからぬのではないか。」

と、そり返つてにらみつけたら、

「まあ、氣の早い坊ちゃんだ。さう怒らなくても善いではありませんか。では、あなた知つて居ますか。」

と、憎面いほど落着いて居るから、なほ癩にさはつて、

「知つて居るとも、知らなくつてどうする。」

とはいつたが、しかし、實は、さつぱり解らなくなつて終つて、人に聞かれ  
ては、とてもはつきりとした返事など出来さうにもない。

「では、後學のために承つておきませう。生き物とは、一體どんなものでせう。」  
おや、之れでは、こちらの武器を、もぎ取られて、向ふから打たれるやうな  
ものだ。中々に、アミーバの奴、下等動物だなどと侮つて居ると、僕らの手位  
には、おへない。

「第一、君も生物のはずだね。」

と僕もくそ度胸をきめて、高飛車に出た。

「無論です。りつばな生き物です。あなたと同様な。」

と、特にお終に力を入れて、ちろ／＼と僕の顔を見て居る。僕も負けてなる  
ものかと、手を後に組んで、

「僕も君の通り、りつばな生き物です。所でね。お互の身體は、大體細胞で

出来て居るわけですが、君は唯だ一つ、僕はそれは數へ切れない程の多くの細  
胞から出来て居ることは御承知でせう。」

「じゆうぶんに承知して居ます。」

「つまり、君は簡單な原始的な一つの細胞から出来た生き物で、僕は、君らの  
やうな細胞がたくさん集つて出来て居る高等な生き物、いや萬物の靈長なのだ  
といふことも、明かに御承知でせう。」

と、僕はきつと睨み返した。

「僕が簡單で、あなたが複雑なことは、よく／＼知つて居ますが、簡單と複雑  
とで下等上等をきめて、萬物の靈長だなどと名をつけるのは、それはあなた方  
の勝手です。しかし、今そんなことを自慢して見た所で、最初の、生き物とは  
何かといふ問のお答にはなるまいかと存じます。」

もつともな話だ。僕も、何だか癪にさはつたから萬物の靈長を持ち出したの

だが、問題は如何にも、生き物とは何かの一つであつた。弱つたな。飛んでもないことをいひ出して、全で自分の手で自分の首をしめるやうなものだ。何でも善い、かうなれば、思ひ通りにいつて見て、ともかくも勝たなければならぬ。

「生き物はね、第一番に、身體が細胞で出来て居る、細胞は何で出来て居るかは御承知でせう。」

こちらからも盛んに質問をあびせかけないとアミーバの質問は随分鋭いから。

「さうですね、蛋白質や澱粉や油や、砂糖などからでせうね。ですが、そんなことをお聞きになつてどうなさるのです。」

中々油断をせぬ。いつでも、こちらが受身になつて終ふ。

「生き物は、さうした物で身體が出来て居て、それから、息をして食べ物を食べて居れば、間違なく生き物であるといつてさしつかえないと思ふ。」

今まで考へたことを一口にいつてしまつた。うるさいから、早く切り上げて御免をかうむらうと思つて。

「なる程ね。身體が細胞で出来て居て、息をして、物を食べれば文句はない、生き物に違ひないわけですね。僕もお説の通り細胞で出来て居て、物も食べれば息もする。だからりつばな生き物だ。なる程、坊ちやんは偉い。」

と溝の中へ隠れて終つた。としたらどうであらう。實は、近頃は、何を見ても、こんな論をして見たくなくなつて仕様がな。家の前の溝を見て居たら、つひ、アミーバはこんな所に居るのだなと思出して、ぼんやり腕組をしたまゝ、こんなことを夢見るやうに考へて居たのであつた。

ともかくも僕の見るところでは、生き物の身體は、蛋白質や澱粉やなどで出来て居て、決して、石や土くれでは、出来て居ない。昔話には、石に生き物の性があつたなどといふことがあるものだが、無論そんなものは、今の人の目から見

れば、一の迷信にすぎないと思ふ。蛋白質や澱粉や、砂糖や油など、大抵、きまつたもので身體が出来て居る。先生は、こんな種類の物を有機物といふのだと教へてくれたが、蛋白質も、さらに調べて見れば、炭素、酸素、水素、窒素などのやうなものから出来て居るはずだから、生き物の身體以外の物、あれは何といつたかな、さうく無機物、無機物と少しもかはつたものではないわけであるが、唯、生き物の身體をこしらへて居るといふ所から、別な名をつけたのであらう。ともかくも、生き物の身體は有機物で出来て居るに違ひない。

だから、生き物である第一の條件は、先づ身體が有機物でなければならぬといふことであらう。若し世の中に、生き物が出来るとするならば、必ず有機物でなければならぬ。今の世の中には、有機物でない生き物はないのだから。有機物をこしらへることが出来たらば、生き物の出来る第一の仕事は出来たと考へねばなるまい。これに息を吹き込みさへすれば、ちやうど神さまがアダムを

造つたやうに、生き物になるわけだ。もつとも、アダムは、土くれに息を吹き込んだはずであつたが。

さあ、有機物は、造ることが出来るのだらうか。造ることが出来なければ、有るはずがないのだが、一體、誰の手で造られるのであらう。

先生に聞くのには明日でなければならぬ。お隣の兄さんは、未だ歸つて来ない。さうだ、お父さまだ。

お父さまの室をのぞいて見たら、障子を明け放して、椽へ出て、日向ぼっこをして居る。

「お父さん。」

と呼んだら、柱に背をもたせたまゝ、くるつとこちらを向いて、

「何だ。」と陰氣臭さうだ。僕は、この陰氣なお父さまの顔が、どういふものか大好きだ。室を通つて椽先きに立つたまゝ、

「有機物ね、生き物の身體をこさえて居る。」

「むう。」

「あれは自然に出来るのですか。」

「自然にといふが、さうだな。人間の手では、出来るものもあるが、出来ないものもある。」

「ならば、一體何がこさえるのですか。」

「生き物がこさえるのぢやないか。」

はてな、生き物がこさえる、人間の手で出来るのと出来ないのがあるのに、どんな生き物がこさえるのであらう。

「どんな生き物がこさえるのです。人間でさへこさえることの出来るのと、出来ないのとあると、今おつしやつたのぢやありませんか。」

「なる程な、解らないか。それでは問ふて見よう。生き物は、どうして出来る

か。」

生き物は、親があつて、それから分れて出来るにきまつて居る。

「親から出来ます。」

「なる程、親がなければ出来ないか。」

「出来ません。」

どうせ、わくといふことはないはずであつた。いや、僕のこれまで考へた所では、どうしても、最初の先祖はわいたものだとなつたのだが、今日までの所では、その生き物がわくといふことは證據がないのださうだから、かう考へた。

「それならば、生き物がなければ、生き物は出来ないんぢやないか。」

その通りだ。

「さうです。」

さうですといつたが、一體僕の聞かうと思つたのは、何であつたかな。え



と、有機物は何がこさえるかといふことであつた。有機物は生き物の身体だから、つまり、生き物をこさえれば有機物は出来るわけだ。それでお父さまが、こんなことをいふのだな。どうも、お父さまは、くはしく話さないから困る。何でも謎のやうに、はしつこの方を少しばかり話しておいで、だまつて居るから、よほど、後から考へないと駄目だ。お父さまは、あんなことでは先生にはなれない。あんな先生なら、随分不親切だと嫌はれるにきまつて居る。

「それで、つまり、有機物は生き物がなければ出来ないんですね。」

「解つたか。」

「はい。」

之れ位、心配して考へたら、ちよつと位は、賞めてくれても善いと思ふが、昔から、一度も賞めてくれたことがない。

僕もお座敷の椽に出て、お父さまがして居る様に、柱にもたれて日向ぼつこ

をした。そして庭の椿の頭越しに晴れた空を眺めて、ぼつ／＼考へごとを始めやうといふのだ。全でお父さまになつたやうだ。どうしたものか僕は、お父さまのすることは、何でも好きで、真似がして見たくなる。

有機物は生き物がこさえることは解つた。さうすると、人間やなどでも、炭素や窒素などを身体にとつて来て、有機物にするのだらうか。待て／＼、僕らの食べるものは皆、木や草や魚や牛などだから、始めから有機的を食べて居ることになる。石などはめつたに食べないから。

それで思ひ出す、何時か先生が、蛋白質などは動物は作りません。皆葉のある植物が作るのですと云つたことがあるが、人間からアミーバに至る、いや、こんなことをいふと又アミーバに叱られるかも知れぬが。一切の動物は皆、始から有機物を食べ物にして居るわけだ。又植物でも、茸やバクテリアなどは、有機物ばかりを食べ物にして居るはずであつた。唯、葉があつて同化作用をす

ることの出来る植物が、有機物をこさえるといふことであつた。

つまり、この世では、植物の他に、有機物をこさへるものがないといふことになる。

とすると、有機物の出来る前に、必ず植物がなければならぬといふことになるのだが、これはすこぶるおかしい。植物も有機物ではないか。有機物が出来るのには、始から有機物がなければならぬといふのは、とんちんかんな話である。がともかくも、植物が現今やつて居るやうなはたらきをもつたものがなければ、どうしても有機物は出来ないといふ考へねばならぬ。

けれども、又一方、植物といふ様なきまつた物がなくても、此の世界の何所かで、又いつの時代かに、ちやうど今の植物のやうなはたらきがあつて、それによつて出来たとも考へられる。例へば、地球の上で、温い所に出来る生き物と、冷たい所に出来るのとで、違ひがある様に、その場所の工合が、何かにつ

けて善く出来て居たらば、有機物が出来ないとも限らないと考へられる。しかし、僕のこれまで聞いたたり考へたりした所では、昔から今まで、有機物が、即ち生き物がわいたといふことはないといふことになつて居る。いや、僕は、生き物は、どうしてもわかなければならぬと、進化論でおしつめたのであつたが、進化論は、生き物がわいたことはこれまでもなく、今の世にもないといふことから立てられた論であつたのだから、どうしても、自然には、生き物は、即ち有機物は出来ないといふことを考へねばならぬ。

つまり、どうしても、始めに植物か、又、それと同じやうな力をもつたものがなければ、生き物の身體は出来ないといふ考へねばならぬ。

と考へると、その始めの植物はどうして出来たか、それも植物か、又、同じやうな力をもつたものが始めになればならぬ。その始めは、その始めはと考へると、さうだな、果てがない。まるで、算術で十を三で割ると、幾ら割つて

も割つても答が三三……となつて果てがないのと同じだ。

始めから、そんな力があるといふのはおかしい。何だか有るはずがないと思はれて仕様がなない。ひよつと出来たのではないか。ひよつと出来たといへば、つまり、わいて出たといふことになる。わくといふことはいはずであつたが、かりにわいたとしても、わかされたものがなければならぬ。何も力がないのに、自然の力のはたらいて居る中に、ひよつと生き物といふやうなものをこさえてほふり込むのには、自然の力とは別な力がなければならぬ。さう考へると、生き物の身體、即ち有機物は、自然の力より別な植物の力のやうな力が始からなければ出来ぬものと思はねばならぬ。

やはり、どう考へて見ても、同じことになつてしまふ。

これはどうもおかしい。進化論をおしつめて行つたら、死んで居る石ころや土くれから、生き物がわいて出なければならぬとなつたが、今日のやうに考へ

ると、ちやんと始から生き物がなければならぬ。生き物の力がなければならぬ。自然の力とは違つた生き物の力がなければならぬとなつて来る。これは、一體どうしたものであらう。お父さまのやうに日向ぼっこをして考へたら、随分善く考へられたが、考へれば考へる程、ますます解らなくなつて来る。

おかしいな。自然の力と違つて居る生き物の力。一體、自然の力と生き物の力と、どう違ふんだらう。

文章には、よく、人間も、鳥や花も皆自然の中の一つにすぎないといふやうなことが書いてあるものだが、そんな風に見て行くと、生きて居るといふことも、自然のはたらしの一種類にすぎないとなつて、自然の力と、生き物の力とを別々にする必要はなくなるわけである。その必要がなかつたら、しいて區別を立てなくても善からう。それでは、自然の力を生き物の力と、生きて居ない物の力と、二つに分けて考へるとして、生き物に、はたらく力と、生きて

居ない物に、はたらく力とは、どう違ふんだらう。

生き物にはたらく力は、その物に新しい物を取り入れて、古いものをすてて、どこまでもその物を保つて行くやうに出来て居ることは、前から考へて居る所であつた。生きて居ない物にはそれが無いといへば、今さら、どう違ふんだらうなどと疑はなくても善いのだが、何だか、その自分の物を保つて行くことの出来るはたらきと、保つて行くことの出来ないはたらきとの關係が、はつきり解らない。第一、關係があるのか、ないのか。どうも、頭が、こんがらがつて何が何やら、さつぱり解らなくなつてしまつた。

今日はこれで止さう。又、今度考へなほして見よう。お父さまはもう室に入つたのであらうか。

日は暮れて終つて居る。

## 五 生き物の生命とは何か (口)

随分むづかしいことになつて終つた。こんなことを毎日／＼考へて居ると、何をするのも、さつぱり面白くなつて仕様がなない。義雄ちゃんなど、毎日のやうに、紙鳶上げに半里も向ふの原つばへ出かける。僕も、あんな小高い見晴らしのいい所へ行くのは好きだが、何だか、あゝしてびん／＼はねまはることは、おつくうになつてしまつて、どうしても一所に遊ぶ氣になれない。この子は毎日考へごとばかりして居ると、青瓢箪になつてしまふと、お祖母さんがいつたが、ほんとうにこれでは青瓢箪になつて終ふかも知れぬ。實は、飛んだりはねたりは随分好きな方で、かけっこをしても、めつたに負けたことはない。野球にも、俱樂部でも學校でも捕手をつとめて居る。しかし、考へごとを始め

ると、何だか、そんなことがうるさくなつて来て、友だちから隠れるやうにして、木立の間や、公園やなどへ逃げて行きたくなる。

今日は、大へんにお天氣が善い。お隣の鶯は朝早くから、まはらぬ舌でほけきよ／＼と鳴いて居た。あゝ、春が来た／＼と便所の中で、つく／＼感じたのであつたが、家の中になつとして居るのは馬鹿らしくなつて来た。明日は、一日何所かで遊んで歸へらうか。吉祥寺の井の頭公園へでも行かうか。一人ではやはり淋しい。よし、さうだ。先生を引っぱり出さう。義雄ちゃんは、何所へ行つても、お菓子を食ふことばかり考へて居て、氣のきいた話など相手にならないから、一所に出ても、ちつとも、面白くない。先生に限る。

「先生、明日は何かお仕事がありますか。」

と、お晝の休憩に運動場で尋ねた。

「明日、さう日曜ですね。いや格別仕事といふことも、きめては居ませんが。」

どうしたんですか。」

「僕ね。明日は、一日、何所かで遊んで歸らうと思ふんです。先生がお暇でしたら……。」

一所に行つて頂きたいといふのもへんで、口ごもつて居たら、

「さうですね。何所かへ参りませうか。何所が善いでせう。鎌倉の方はあまり遠いやうだし、何所が善からう。」

と考へて居たから、

「先生、井の頭は、どうでせう。」

「なる程、それは善からう。井の頭は、ちようと手頃だ。さうきめませう。では九時つ頃に、僕の方へ来てくれませんか。」

「えゝ、そして上野からですか。」

「さうませう。」

話をついた。お天気が善ければ善いが。

案じた所ではない。今日のやうなのが、うららくといふのだらう。新宿で中野行に乗りかへたが、中野驛で一時間ばかりも待たせられたのには弱つた。やうやくにして吉祥寺行が来たが、井の頭についたのは、十一時頃であつた。

玉川上水のほとり、枯薄の中を後先きになつて、と切れ／＼に話しては、立止まり、水の早い流れを見た。

「先生、生き物／＼といひますが、おかしいですね。生きた物と、生きて居ない物と、一體何所が違ふんですか。」

「生き物と、生きて居ない物……さあ、何所が違ひませうね。」

と先生は薄の葉をもぎ取つた。

「僕には、生き物といふものは、自然には出来ないもので、始からあつたものでなければならぬといふことと、生きて居ない物との相違は、自分ではたらい

て、自分の身體をどこまでも保つて行かうとして居る所にあるといふことだけは、考へられました。何だかそれだけでは、解つたのか解らないのか、ちつとも解りません。」

「おかしいね。解つて居るのなら、解つて居るのぢやありませんか。それだけ解つたら解つたわけではありませんか。」

「僕には、それだけではうれしくないのです。いつでも、物を考へて解ると、大へん氣持がいいんですが、今度はちつともよくなりません。まだ實際は解つて居ないんぢやないかと思ひます。」

「さうですね。困りましたね。どうしてでせう。一體、何所が解らないといふのです。」

問はれると困る。それはこちらから聞かねばならぬことであつた。自分は大體、何が解らないのであらうと人に問ふ位、のろまな話もないものだが、ほん

とうだから仕様がな。何所かはつきり解らないが、解らない所があるのは確かだ。此の氣持がそのりつばな證據だと思はれる。

「僕も、解りませんが、確かに解つて居ない所があるのに違ひありません。」  
「全く之れでは始末が悪い。私は一體何所へ行くんでせうと銀座の真中で人に尋ねる様なものだ。困るな。……生き物のはたらきと、生きて居ない物のはたらきと、どう違ふかといふことなら、あなたのお考通りでりつばではありませんか。」

りつばであるかも知れぬ。しかし僕には、そんなことは始から解つて居たことで、一足も、考へが進んだとも思へない。解らないな。

「ともかくも、解らないのです。」

「はてな、解らない。解らないとおつしやるそのことが解らないから、さつぱり解らないことになつて来る。」

先生は又歩き始めたから、僕もついて行く。

さうですぬ／＼と、しきりに首をひねつて居たが、

「うんさうだ。その二つの關係が解らないといふのではありませんか。」  
と立止まつた。

關係が、さう／＼、その關係だ。生き物のはたらきを起す力と、生きて居ない物のはたらきを起す力との關係だ。

「さうです／＼。その關係です。生き物にはたらきと、生きて居ない物にはたらきとは、どんな關係があるかです。」

「いや、解りました。つまり、生き物にはたらきは、生きて居ない物にはたらきと、同じ力か、どうかといふのでせう。」

「ええ、それが違つて居ることは解つて居るのですが、……やはり解りません。」

「や、かうでせう。二つの力は、つまりは同じものだとも見てもいいのか、それとも、全く反対な力であるから見ねばならぬかといふことでせう。」

僕には、何だか、先生のいふことが、はつきりと頭に入らない。同じものだと見ても善いかと先生はいふが、違つて居るのは始から解つて居ると僕はいつて居るではないか。違つて居るのは解つて居るが、さうだな、反対であるかどうかはちよつと解らないかも知れぬ。違つて居ても反対だとは限らないから。しかし、生きて居る、生きて居ないといへばちやうど、ま反対な言葉ではあるが。

「えゝ、違つて居るのは解つて居るんですが、反対であるかどうかは、どうでせうか。」

「面白い、大分、明りが見え出しました。違つて居れば、反対でせう。違つて居なければ同じいで、違つて居れば反対ではありませんか。」

しかし、違つて居ても、ま反対でないものもある。

「違つて居ても、反対だとは限らないではありませんか。幾分かは同じくて、違つて居るのもあるではありませんか。」

「有ります。が、同じ所は同じいで、違つた所は、違つて居るんではありませんか。例へば、親と子と似て居るが、全く同じでもありません。さうすると、同じ所と、違つた所とがある、両方あるのだから、全で同じでもない、全で違つたのでもないとなるとお考へでせう。」

「さうです。」

「しかし、同じ、違つて居るといふのは、親と子との一部／＼を見ていふことでせう。それから、お終ひの、だから同じでも違つて居るでもないといふのは、親と子との全體から見ていふのでせう。始めは一部を見て話しておいて、だから全體から見ればといふのは、ちつとも、論になつて居ないのではありませんか。全體からいへば、唯、親と子とは同じか、違つて居るかの二つしかありませんか。」



すまい。違つて居ないものなら同じなんだから、同じくなければ、反対でせう。違ふといふことと、反対といふこととは、同じ意味でせう。」

先生は随分理屈をいふ。あまり面倒臭い理屈では、かへつて解らなくなつて終ふ。しかし、違ふといふことと、反対といふこととは同じ意味でせうとは、なる程それに違ひない。反対でないものなら同じにきまつて居る。同じくも、反対でもないといふのは、関係がないといふことになるわけだ。

「さう考へられます。それで生き物にはたらく力と、生きて居ない物に、はたらく力とは違つて居るから反対だとおつしやるのですか。」

「違つて居るものならば、反対でせう。どうしても、生き物にはたらく力は、生きて居ない物にはたらく力と違つて居るとしか考へられないならば、反対だといふの他はありますまい。」

反対だ、生き物にはたらく力と、生きて居ない物にはたらく力と反対だ。と

いへば、つまり、反対の関係があるといふことになる。生きるといふことと、生きて居ない即ち死ぬることは反対だから、反対だといふのは不思議もないが、どんな風に反対であらう。自分の身體を、どこまでも保つて行くことは生き物のはたらしきで、生きて居ない物には、それが無い。其所が違ふから、違ふものは反対だといふ意味で、だから、反対だと理屈をいへば、いはれもしようが、それだからといはれても、中々、合點がいかぬ。違ふのも解つて居り、違ふこととは反対といふことと同じ意味だとも承知はしたが、今、此所で、だから、と持つて來られてもなる程と合點することが出来ない。

「反対だといはなければならぬのですが、やはり、どうしても、心の底から、さうですといふ氣持になれません。」

先生は、今度は池の方へ行かうと、左へ折れて、林の中へ入つた。おひる頃の日影が、地に黄色の模様をかいて、如何にも温かさうだ。

「さうですか。それでは一つ、あなたの合點のいくまで論じて見ませうかな。……それでは、違ふ所は後廻しにして、先づ同じ所はないかといふことを調べて行きませう。」

生き物は、先づ、息をするはずでしたね。息をすることは、生きて居ない物にはないことですが、これは、果して、ほんとうに、生き物にばかりあつて生きて居ない物にないことでせうか。」

そんなことは、今まで、幾度も考へたことである。考へたあげくに、そんな結論になつたのであつたのに、又、先生が持出すのは、一體、どんなれうけんなのか。

「ないと思ひます。」

「ないでせうか。呼吸作用は、酸素をとつて、炭酸瓦斯を出すことでせう。酸素は、身體に入つて、主として炭素などと化合するのでせう。」

「さうです。」

「酸素の化合といふことは、生きて居ない物にはないことでせうか。」  
酸素は何とでも、大抵な物と、化合するはずである。

「大抵な物と化合します。」

「酸素にもやされることは、大體、物と名のつくものであれば、ほとんどきまつたことでせう。又、酸素と炭素と化合して、炭酸瓦斯になることもきまつたことでせう。植物が養分を吸ひ上げるのは、毛細管現象と名をつけられるはたらきだとすると、これなども、生き物でなくても、普通、理科で教はつた事柄に、ざらにあつたことでせう。」

如何にもその通りだ。酸化のこと、炭酸瓦斯のこと、毛細管のことなど、皆、生きて居ない物の間に行はれるはたらきである。

「血のめぐること、それから神経のことなどでも、皆、大抵は、自然にあるは

たらしきで説明が出来るのでせう。つまり、身體は、こみ入つた器械のやうなもので、一々理屈に合ふやうな、はたらしきをして居るのでせう。もつとも、酸素が身體の細胞をもやして出来た力が、どのやうになつて、身體中の色々なはたらきが出来るか、中々説明しにくいのです。又、神経のはたらしきの正體はどんなものか今の所では解つては居ないでせう。そんな所はありますけれども、學問さへ進んで来れば、説明することも出来ないことはないでせう。神経のはたらしきは、電気のはたらしきに似て居るとか何とか、段々に學問の上から、證據を立てることが出来て来ますから。」

なる程、血の循ることや神経のことなどは、随分不思議なことだと思つて居たのだが、考へて見ると、心臟の伸び縮みによつて血が押し出され、瓣膜によつて、逆流れを防ぎ、浸透作用によつて、酸素や、養分などと、いらなくなつた物とを交換することなど皆、外の物のはたらしきとかはりのないものとして説

明が出来ると。そらすると、生き物のはたらしきだとして、格別に、違つたはたらしきでもないやうに考へられて来る。生きた物、それは生きて居ない物のはたらしきと、同じはたらしきだ。ちつとも違つたものでないと思はねばならなくなる。

池のほとりに出た。ベンチに腰を下して、

「如何にもさうですね。さうです。さう考へると何だか、いよ／＼解らなくなりますね。」

「かう考へて来ると、生き物と、生きて居ない物との區別が出来なくなつて来ます。けれども、二つの物が、同じはたらしきであるならば、生死と昔から分けて考へて居るはずもなく、又今の學問の上から、有機物、無機物とか、生物、無生物などと、やはり區別して居るわけではない。分けて居るのには、その理由があるはずで。大分考へましたけれども、はつきりした考にまともありません。見當はつけて居ますが、今少しまとまつてからお話しませう。」

それから、池のほとりをまはつて、茶屋で御飯を食べて、烏山の方へ出て電車で歸つた。

何にしろ、次第／＼にむづかしくなつて終つた。

大體、先生によく解らないことを僕が考へようなどとは、無理であらう。あらうが、考へなければ我慢が出来ない。これでは、しかしやり切れない。今日は、うんと遊ばうと井の頭まで行つたのであつたが、よけいにむづかしく考へ込んで終はなければならなかつた。

が、何とかおさまりがつかなければ承知が出来ない。

そんな風に生き物のすべてのはたらきが、生きて居ない物のはたらきで説明が出来るとすれば、特別に生き物として、生命があると取り立てていふほどのことはないであらう。

待て／＼、もう少し落着いて考へなほして見なければならぬ。

確かに生き物はある。生き物が死ぬることもある。その生き物のはたらきは、確かに、生きて居ない物のはたらきとは違ふ。所が、その生き物のはたらきは、皆、生きて居ない物のはたらきで説明が出来るとすれば、生きて居るのも、生きて居ないのも同じことである。けれども、生き物は確かにある。はてな。幾ら考へても同じことになつて終ふ。

ともかくも、生き物はある。これが生きて居ない物と同じはたらきであるならば、生きて居ない物を皆、生き物といふことも出来るのであらう。しかし、生きて居ない物を生きたものと呼ぶことはどうしても出来ない。これを呼ぶには、生きて居ない物が生きて來なければならぬ。生き物が死ぬることはあるが死んだものが生きて來ることは、ヤソの昔話などのやうなことの他、聞かないことである。さうだ／＼。生き物は、自然にはどうしても出来ないはずであつた。確かに生き物は、自然にわかないと考へたのであつた。生き物は、どうし